

規範意識を高める学校・家庭・地域の相互連携の在り方に関する研究 —学校・家庭・地域の相互連携を核とした道徳教育の推進— （中間報告）

社会全般の規範意識向上が急務である。児童生徒及びその保護者を対象に、規範意識に関する調査を行った。その結果を踏まえながら、規範意識を高めるための学校や家庭、地域の役割を模索している。家庭や地域の教育力が児童生徒へ効果的に働くよう、新学習指導要領で位置付けられた道徳教育推進教師などが中心となり、「顔が見える話し合い」をきっかけに「目標を共有」し、「互いに有益」となる相互連携の実践を進めた。その結果、家庭や地域の人とかかわる体験活動や道徳の時間を通して、児童生徒は自己を見つめ、共によりよく生きるよさを感じ始めている。

<検索用キーワード> 規範意識 実態調査 自己肯定感 道徳教育
新学習指導要領 道徳教育推進教師 相互連携

研究会委員

あま市立甚目寺西小学校教諭	鈴木 文博（平成21年度）
豊橋市立岩西小学校教諭	稲田あけみ（平成21年度）
武豊町立武豊中学校教諭	岩橋 雅高（平成21年度）
刈谷市立朝日中学校教諭	吉田 幸和（平成21年度）
県立守山高等学校教諭	菅原 弘勝（平成21年度）
総合教育センター経営研究室長	浅井 厚視（平成20,21年度）
総合教育センター研究指導主事（現教科研究室長）	川澄 誠（平成20年度）
総合教育センター研究指導主事（現県立旭丘高等学校教諭）	小塩 卓哉（平成20年度）
総合教育センター研究指導主事	宮崎 千智（平成21年度）
総合教育センター研究指導主事	岡村 直樹（平成21年度）
総合教育センター研究指導主事	平手ゆり子（平成21年度）
総合教育センター研究指導主事	貝沼 眞幸（平成20,21年度主務者）

1 はじめに

子供を取り巻く家庭や地域の環境は厳しくなっている。核家族化、少子高齢化社会となっているのは周知の事実である。激しく変化する経済中心の社会で、価値観は多様化し、機械化、情報化などによる効率化により人間相互のかかわりが減少した。交通網と情報通信網の急速な発展により生活拠点が必ずしも地域である必要もなくなり、その結果として、地域コミュニティ崩壊が懸念されている。

遊び場の減少、不審者の増加などに、家庭用ゲームやインターネット、携帯電話の普及が拍車をかけ、児童生徒の育ちや生き方も変容している。特に、「ジコチュー」と「引きこもり」のように自尊心は二極化が進行するなど、人間関係を形成する力や社会性に未熟さを感じる。公共の場でのマナー

は低下し、新聞紙上の読者の投書欄では、電車の中のマナーや店での大人や子供の振る舞いを嘆く内容が絶えない。肝心の本人は周囲から注意されても、悪びれた様子もなく平然としている。

学校現場では、いじめ・不登校など従来から続く教育課題に加え、情報モラルの指導や発達障害への対応など新たな課題も生まれている。このような多くの課題を抱えつつ、教師は、生きる力をはぐくむために道徳教育を柱に、体験活動や言語活動の充実を図っている。また、服装違反や遅刻者への指導などをはじめ、あいさつや返事の仕方や言葉遣い、食事のマナー、履物そろえなど基本的な生活習慣も重視し、粘り強く指導している。学校での指導が効果的に働くよう、児童生徒の生活拠点である家庭や地域との相互の連携が必要である。

2 教育基本法の改定

教育基本法が60年ぶりに改正された。その前文には「公共の精神」を尊ぶことが掲げられ、第2条には「教育の目標」として「豊かな情操と道徳心を培う」ことや、「自律の精神」「公共の精神」「生命を尊び、自然を大切にす態度」など育成されるべき児童生徒へ求める具体的な姿が示された。さらに、第10条には、「父母その他の保護者は、子の教育について第一義的責任を有するものであって、生活のために必要な習慣を身に付けさせるとともに、自立心を育成し、心身の調和のとれた発達を図るよう努める」と明記され、保護者の責任が改めて強調されている。第13条には「学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力に努めるものとする」として、家庭や地域との連携及び協力が記されている。学校だけでなく社会全体が連携して、まさに「社会総がかり」で、児童生徒の公共の精神をはじめとする道徳性を育成することが謳われている。

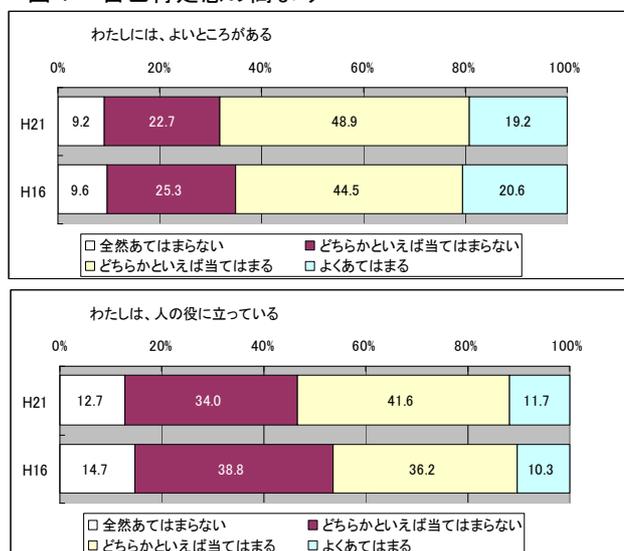
3 規範意識の醸成にかかわる先行研究

総合教育センターでは、平成16年度から平成18年度の3年間に、「豊かな心の育成を目指す指導の在り方」に関する研究を行った。自己肯定感や規範意識にかかわる実態調査と実践により、次のように成果と課題をまとめている。

- ・規範意識の醸成には、自己肯定感と過去の体験が深くかかわることが分かった。
- ・「言葉」と「体験」を意識し、幼小中高による異校種連携に取り組み、一定の成果があった。
- ・社会全般の傾向として「よい子志向」「同調志向」が強く、周囲（含む慣習）により、規範が乱れると修復困難であることが分かった。
- ・家庭の機能低下、地域の人間関係希薄化が見られる。
- ・地域に開かれた学校経営による、家庭・地域の価値再生が必要である。

これまで、各学校では体験活動を重視し、学習の充実を図ってきている。当センターの平成16年度と平成21年度の調査を比較すると「わたしにはよいところがある」「わたしは、人の役に立っている」と感じている児童生徒の割合は、図1のように、この5年間で増加傾向にあり、「自己肯定感」は高まってきているととらえることができる。

図1 自己肯定感の高まり



4 研究の目的

家庭や地域の価値再生を含め、児童生徒の規範意識を高めるための効果的な相互連携の在り方に関する研究を進めるために、本研究の目的を次のように設定した。

規範意識に関する実態調査や実践を通して、学校、家庭及び地域の役割を明確にしながら、規範意識を高める効果的な相互連携の在り方を探り、各学校の道德教育推進や家庭及び地域の教育活動の具体的な指導や支援に役立てる。

5 規範について

教育基本法の改定や学校教育法の改正に合わせ、平成19年5月には、衆議院の教育再生に関する特別委員会などによって、社会の事象を取り上げながら、規範について論議がなされた。その論議の内容や文献を参考にしながら字義的な意味も踏まえて、規範を次のようにとらえた。

ある物事に対しての是非、善悪を判断、評価したり、行動したりするときによりどころとなる価値の基準。法律、ルール、道德、その集団の慣習が基準となりうる。

また、規範意識とは、集団にある規範に対する行為者の価値意識やそれに従おうとする態度であるととらえる。集団の構成員は、その集団が集団として機能するよう、集団の規範に従って同調することが求められる。

これまでに規範意識については様々調査され、「人のものを盗る」「列に割り込む」等、相手若しくは集団に対しての利害が明確で、著しく迷惑となる行為と判断できることについては、依然として規範意識が高いことが分かる。しかし、「校則を守らない」「授業を抜け出す」といったそれぞれの学級や学校によって求められている規範については、権威によって維持されているケースが多く、特に校則については年齢があがるにつれ児童生徒には受入しがたいものとなり、心の成長に伴う権威への抵抗もあって、規範意識が低くなることが分かる。また、自分に近い存在、例えば親や友達との間には、規範意識が保たれるが、他人など存在が遠くなるにつれ規範意識が薄れる傾向も挙げられている。

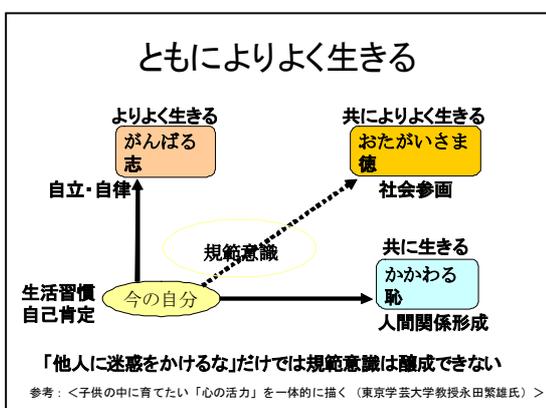
規範意識は、自然に身に付くものではなく、様々な場面で人・もの・こととかかわる中で形成されるものであると考える。例えば、子供は遊び仲間を形成し、その集団のルールに従って遊んだり、行動したりする。守られなければ遊びが成立しなかったり、集団での行動がとれなくなったりして、当然、仲間からはずされることとなる。学習場面でいうと、学級で「チャイムを守ろう」と生活目標が示されると、その集団は守ろうとする。守られないものは集団から非難され恥ずかしい思いをする。「チャイムで着席」なのか「チャイムで始業」なのかは指導者によっても異なるが、指導者は注意を

繰り返したり、その意義を説いたりして守らせている。

児童生徒はこのような体験を重ね、それぞれの集団に合わせた規範意識を身に付け、集団が集団として成り立つよう、行為の規準としている。

規範意識の醸成には、多様な社会性、道德性が大きく作用すると考えられる。ルールやマナーを守ろうとする規範意識の醸成には、例えば、思いやりや自律、協調性などが相互にかかわっている。「心の活力」を一体的に描く：永田繁雄氏)多くの学校では、道德の時間をはじめ、

様々な体験活動を通して、思いやりや役割、責任などの道德性をはぐくもうと日々実践している。



6 本研究における実態調査

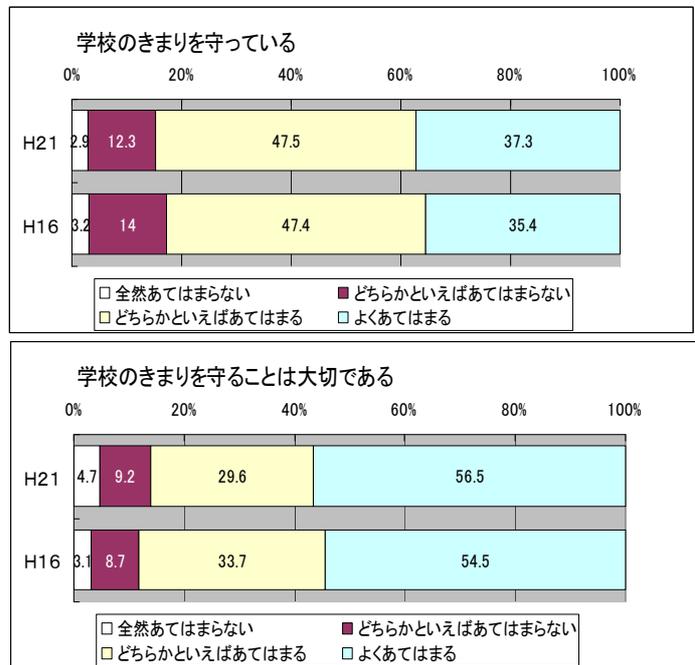
(1) 実態調査の概要

愛知県内の小学2, 4, 6年生と中学生及び高校生の規範意識と、その保護者には、子供の様子や子供へのかかわり、学校への協力意識を調査した。調査は、6,500人を対象に実施し、児童生徒用、保護者用共に択一式である。平成16年度に実施した「豊かな心の育成を目指す指導の在り方に関する研究」の調査と、規範意識の項目を取り上げて経年比較し、規範意識の変容もつかむこととした。

(2) 実際の行為と意識の差

図2は「学校のきまりを守っている」「学校のきまりを守ることは大切である」について、「全然当てはまらない」「どちらかと言えば当てはまらない」「どちらかと言えば当てはまる」「よく当てはまる」と回答した割合を表したものである。「守っている」という「よい子」は増加傾向にある。しかし、「学校のきまりを守ることは大切である」という意識はやや減少している。この2つ

図2 実際の行為と意識の差

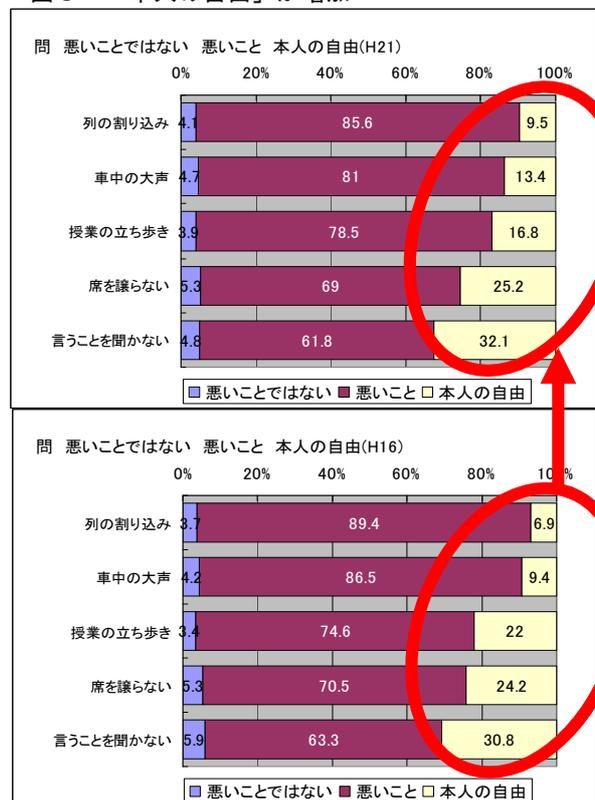


の項目からは、周囲への同調志向の割合が増加傾向にあると判断できる。他に「時間を守る」「命を大切にする」「うそをつかない」「人にやさしくする」「あいさつする」について、大切であるかという意識と実際にそうしている行為を調査した。命や思いやりに関する項目は、意識と行為に差がなく、時間を守ることやあいさつすることに関する項目については、意識と行為に差があった。今後、道徳的実践力を高めることが望まれる。

(3) 「悪いことではない」「悪いこと」「本人の自由」

図3は様々な行為に対して「悪いこと」か「本人の自由」かについて調査した8項目の内、経年調査した項目のみ、割合の高い順に示した。「並び順を守らず、列に割り込みをすること」「電車内や駅など公共の場で大声で話すこと」「授業中に勝手におしゃべりしたり立ち歩いたりすること」「電車内で、お年寄りや体の不自由な方に席を譲らないこと」「親や先生の言うことを聞かないこと」の順に規範意識が高いと言えるが、「授業中のおしゃべりや立ち歩き」を除いて、他は「悪いこと」と回答する割合が減少し、「本人の自由」が増加した。善悪の判断があいまいである割合が増加していると考えられる。必要な価値を教え、多様な考えに触れさせながら、体験を繰り返す中で判断力を高める必要性を感じる。

図3 「本人の自由」が増加



(4) 保護者の意識

(3) の項目について、「児童生徒の行為として」保護者に調査した。すべての項目で児童生徒より「悪いこと」の割合が高かったが、「お年寄りや体の不自由な人に席をゆずらないこと」については「悪いこと」の回答は 71.9%に留まり、差がなかった。保護者のもつ規範意識を児童生徒の規範意識を高めるために生かすと共に、社会全体の規範意識を高めたい。

また、「学校への協力」意識についても調査した。図 4 のように「行事への参加」や「学習習慣、生活習慣の改善」については協力意識が高い。しかし、「具体的な意見を言うこと」については「協力できない」という抵抗感が増える。連携する際、互いに意見を伝える場の設定の機会や内容、方法について配慮する必要がある。

(5) 児童生徒と保護者のずれ

児童生徒に「よいことと悪いことを教えてくれる人はだれですか」を聞くと、図 5 のように 77.2%の割合で「親」と回答している。5 年前よりその割合は上昇し、身近な「親」の意識が、児童生徒の価値観に大きく影響することが分かる。また「悪いことをして親に強くしかられる」経験について、「全然ない」「どちらかといえばない」と回答した割合は増加している。「強くしかられる」は 65%ほどの児童生徒が「ある」と回答している。また「親はルールやマナーを守ることの大切さを教えてくれる」と答える割合は 77%を超えている。しかし、保護者が児童生徒へ「ルールやマナーを守ることの大切さを教えている」の回答は、児童生徒の「教えられている」より割合が高く 93%に迫っている。児童生徒の「教えられる」と保護者「教えている」のずれが生じており、保護者が思うほど児童生徒には伝わっていないことが分かる。大人は、このことを忘れずに、様々な場面で必要に応じて繰り返しかかわりをもつことが大切であると考えます。

図 4 保護者の学校への協力意識

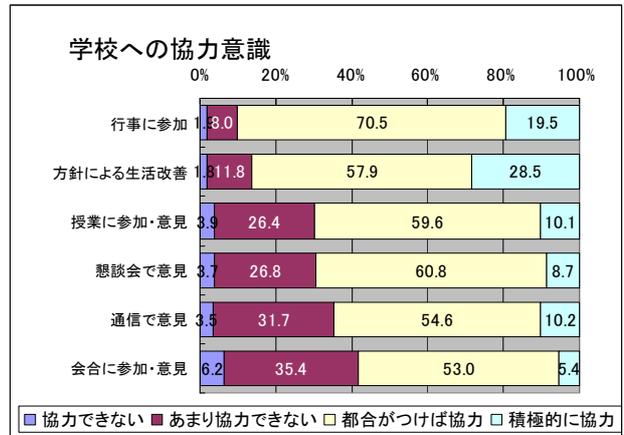


図 5 祖父母や友だちの割合が減少した

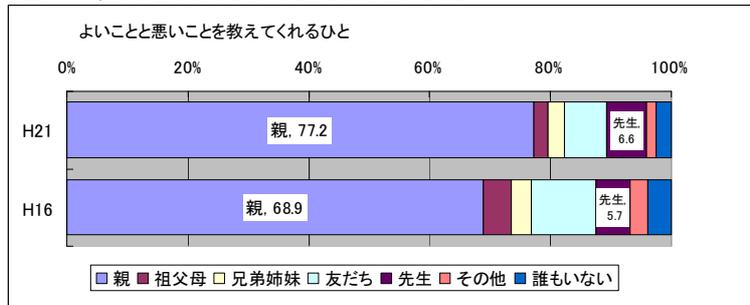


図 6 親は強くしからなくなった

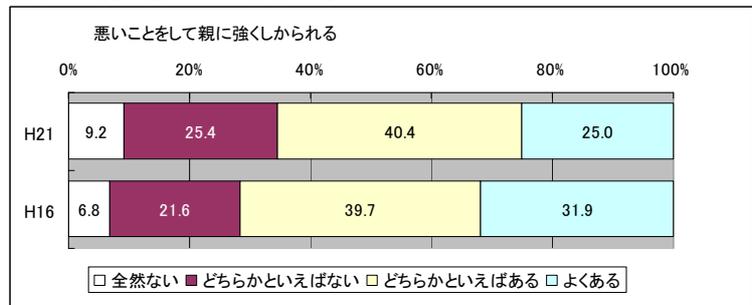
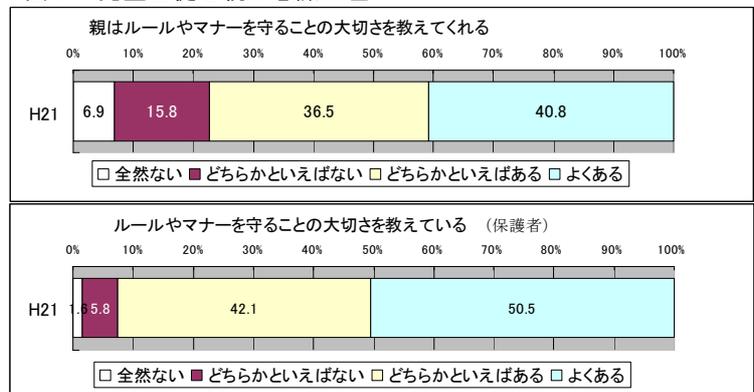


図 7 児童生徒と親の意識の差



7 道徳性の発達段階

小中学校の新しい学習指導要領では、「2の道徳性の発達と道徳教育」で道徳性の発達や各学年段階における道徳性の育成について述べており、まとめると次のようになる。

低学年	中学年	高学年	中学校
自分でしなければ ならないことができ るようになる。 善悪の判断は教師 や保護者の影響を受 けるが、理解でき ようになってくる。	集団のきまりの意義 を理解したり、自分た ちで決まりをつくり守 ろうとしたりする。 身近な人を意識して、 自己の在り方を決める。 相手の立場にたって考 えることの大切さを自 覚させる。	相手の身になって人 の心を思いやる共感能 力が発達。自分の役割や 責任を自覚する。自律的 な傾向を育てる。民主的 な社会を維持し発展さ せる価値観と規範意識 を形成させる。	中学生の自己探求と 自己確立の過程は、他律 から自律への過程でも ある。 大きな影響をもって いた親や教師の存在は 相対的に小さくなり、仲 間集団が大きな影響を 及ぼす。

これらの流れは、他律から自律へと発達を促すようになっている。児童生徒の規範の価値を判断する基準が、親や先生から、身近な存在、他人、集団、社会へと広がっている。

学習指導要領の他に、道徳性の発達について大いに参考となる研究がある。

当総合教育センターでは、平成16年度から平成18年度までの「豊かな心の育成を目指す指導の在り方」に関する研究で、児童生徒の道徳性の発達段階についてコールバーグの研究を取り上げ、次のようにまとめている。

- | |
|--|
| <p>I 慣習的水準以前<善悪を行為の結果(罰, 報酬, 好意)により解釈>
(第1段階) 罰と服従への志向「叱られるから悪い」「守ると褒美がもらえる」
(第2段階) 相互主義志向「やってくれたからやってあげる」「やられたらやりかえす」</p> <p>II 慣習的水準<結果よりも周囲の期待自体に価値>
(第3段階) 「よい子」志向「喜ばれることが善いこと」
(第4段階) 「法と秩序」志向「義務を果たし、社会秩序を維持する」</p> <p>III 原理的水準<道徳的価値と道徳的原理を定義しようとする努力>
(第5段階) 社会契約的な法律志向 個人の権利や社会的規準によって定められる
(第6段階) 普遍的な倫理的原理の志向「己の欲するところを人に施せ」</p> |
|--|

ノーマン・ブルによる「社会律」の考え方も大いに参考となる。ブルは、他律から自律に至るまでに「社会律」が存在することを示している。次のように発達の段階を表にまとめた。

	道徳以前	他律	社会律	自律
キーパーソン	自分(本能)	親・教師	友だち	自分(理性)
動機	自分の快・不快	大人からの賞罰	友達からの快・不快	自分自身の理性
判断基準例	～したいから	叱られるから ～が喜ぶから	仲間外れにされた くないから	自分がして欲しい ことを人にする

ノーマン・ブル著 森岡卓也訳『子どもの発達段階と道徳教育』明治図書

これらを参考にしながら、目の前の児童生徒が、かかわっている人・もの・ことに対して、何を基準に道徳的判断をしているのかなどをとらえ、望ましい指導・対応していくことが必要とされる。

児童生徒の生活は家庭や地域での生活が大部分を占めている。児童生徒の規範意識の醸成には、言うまでもなく親の規範意識や地域の規範が大きく影響する。学校では、集団における規範が個人の規

範形成に大きく影響することを自覚し、学級や学校の集団規範を高めることが重要な課題である。

8 道徳教育の推進状況と新しい学習指導要領

(1) 道徳教育推進の状況

平成19年度調査によると、愛知県では、道徳の時間の年間授業時数は小学校1年で平均36.2時間、小学校2年から6年までで平均35.9時間と、年間標準時間より多い実態がある。中学校では平均33.8時間と標準時間をやや下回っているが、小学校、中学校共に授業の実施状況は概ねよい。

中央教育審議会の平成20年1月答申では、道徳の時間について「その指導が形式化して実効が上がっていない」「学年が上がるにつれて子供の受け止めがよくない」などが指摘された。あわせて、道徳の時間の指導に見られる問題として、①問題の直接的な解決 ②浅い読解的な指導 ③過度な教え込み ④指導過程の形骸化 ⑤体験活動との閉じた関係を、文部科学省初等中等教育局の永田繁雄教科調査官が指摘している。

高等学校では、学校の規律が保たれるよう地道な生徒指導が行われている。総合的な学習の時間や特別活動では、進路指導としてのキャリア教育が中心となり、職場実習やボランティア活動などの体験も行っている。また、公民の倫理では、人間尊重に基づく人間としての在り方・生き方について理解を深めることが目標である。しかし、倫理等教科と体験活動との関連は十分図られておらず、教科は知識の習得に留まっている。

(2) 新しい学習指導要領にみる今後の道徳教育の方向

教育基本法の趣旨を反映させた新しい学習指導要領が告示され、現在、平成23、24年度完全実施までの移行期間中であるが、道徳教育については先行実施されている。

小中学校の新しい学習指導要領の総則では「学校における道徳教育は、学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳の時間を要として各教科、特別活動及び総合的な学習の時間のそれぞれの特質に応じて適切な指導を行わなければならない」と述べられている。また、道徳教育を進めるに当たっては、「教師と児童生徒及び児童生徒相互の人間関係を深めるとともに、(生徒が人間としての生き方についての自覚を深め)、家庭や地域社会との連携を図りながら、ボランティア活動や自然体験活動などの豊かな体験を通して児童生徒の内面に根ざした道徳性の育成が図られるよう配慮しなければならない」と加えられている。

学校教育全体で、計画的に豊かな体験活動を通し、家庭や地域と連携して適切に行うという点では、従来の学習指導要領と大きく変わらないが、社会的な背景を受けて、公共の精神が重視されていることや、学年段階ごとに、集団のきまりやその意義など項目が重点化されている。また、道徳教育推進教師を位置付け、強いリーダーシップの下、全校で取り組む指導体制や家庭や地域との連携体制を充実させようとしている。

道徳の時間における指導に当たっての配慮事項では、「ボランティア活動や自然体験活動などの体験活動を生かすなど多様な指導の工夫、魅力的な教材の開発や活用などを通して、児童の発達段階や特性を考慮した創意工夫ある指導を行うこと」と「道徳教育を進めるに当たっては、学校や学級内の人間関係や環境を整えるとともに、学校の道徳教育の指導内容が児童の日常生活に生かされるようにする必要がある。また、家庭や地域社会との共通理解を深め、授業の実施や地域教材の開発や活用などに、保護者や地域の人々の積極的な参加や協力を得るなど相互の連携を図るよう配慮する必要がある」と道徳教育の充実と道徳教育推進教師の役割について触れられている。

高等学校の新しい学習指導要領では、総則の第1款の2で「学校における道徳教育は、生徒が自己

の探求と自己実現に努め国家・社会の一員としての自覚に基づき行為しうる発達の段階であることを考慮し人間としての在り方・生き方に関する教育を学校の教育活動全体を通じて行うことにより、その充実を図るものとし、各教科に属する科目、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、適切な指導を行なわなければならない」と述べ、求める日本人像を具体的に掲げている。また、第5款の3(4)には「道徳教育について全体計画を作成すること」が示されている。

高等学校での小中学校の道徳に関連する公民「倫理」では、目標に「生命に対する畏敬の念」という文言が加わった。いじめに留まらず、自殺や児童生徒同士の殺傷事件の増加を反映している。さらに、「生きる主体」に「他者と共に」という文言が付き「他者と共に生きる主体」となり、公共の精神に結び付けている。また、特別活動などとの関連も図ることも配慮事項としてあげられている。

(3) 道徳推進教師について

道徳教育の指導計画の作成においては、「校長の方針の下に、道徳教育の推進を主に担当する教師(以下「道徳教育推進教師」という。)を中心に」と示されており、学校全体が一体となって道徳教育に取り組めるよう、中心的な役割を道徳教育推進教師に位置付けている。校長の方針の下、全教師が参画できる体制を具現化するために、道徳教育推進教師の役割が次のように例示されている。

- | | |
|----------------------|------------------------|
| ①道徳教育の指導計画の作成に関すること | ②全教育活動における道徳教育充実に関すること |
| ③道徳の時間の充実と指導体制に関すること | ④道徳用教材の整備・充実・活用に関すること |
| ⑤道徳教育の情報提供・交換に関すること | ⑥授業公開など家庭や地域との連携に関すること |
| ⑦道徳教育の研修に関すること | ⑧道徳教育における評価に関すること |

今後、全教師はもちろんだが、家庭や地域とも共通の認識をもち、道徳教育が充実するよう機能的な体制づくりが必要である。新しい学習指導要領解説道徳編の第7章には「家庭や地域社会との連携」がある。社会の価値観が多様化している現在、学校・家庭・地域が連携し、交流を密にすることは児童生徒の道徳性をはぐくむためには極めて重要である。道徳教育推進教師が連絡・調整役となり、効果的な連携の在り方を構築していく必要がある。

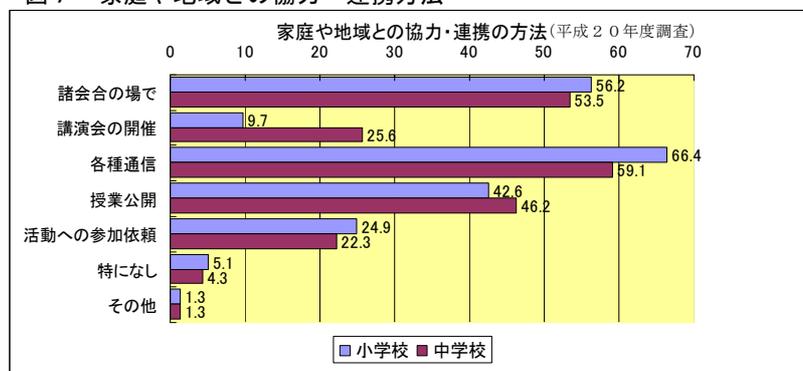
9 相互連携とは

(1) 今までの連携の在り方

昭和52年の学習指導要領改訂で「家庭や地域社会との連携を図りながら」、「道徳的実践の指導を徹底する」ことが加えられ、その中で

「家庭や地域社会との共通理解を深め、相互の連携を図るように配慮する」と述べられていることから、すでに30年ほど前から、学校と家庭、地域の連携の重要性があげられていることが分かる。図7は愛知県の各学校における道徳教育に関する連携の方法を示したものである。現在では積極的な取組が試みられている。高等学校でも、学校の情報発信を積極的に行っており、県下178校のうち、113校が「地域交流・地域連携」を行っている」と回答し、92校が「公開授業」を実施して

図7 家庭や地域との協力・連携方法



いると回答している。(出典「県立学校等における情報発信の現状と展望」平成21年3月)

しかし、平成8年の第15期中央教育審議会では「生きる力をはぐくむ教育」を学校・家庭・地域の連携協力によりすすめる改革が提言されていたが、学力低下問題が表面化したことで、道徳教育の視点が薄れてしまった。学校は「開かれた学校づくり」を目指し、学校の教育施設の開放や情報の公開、地域の教育施設や地域人材の活用をすすめ教育活動を充実させてきた。これらの連携は主に、学習目標を達成するための取組であり、学校主導で行われてきた。平成16年に実施された「教育行政機関における学社連携支援活動に関するアンケート調査」では、「学社連携の目的は問題解決能力の育成や自己学習能力の育成に重点が置かれていること」が分かり、人間関係を形成する力や社会性の育成はあまり重視されていないとまとめられている。

(2) 規範意識を高めるために効果的な連携の視点

従来の連携から一歩踏み出し、「相互連携」に必要な視点を次のようにとらえた。

① 目標や求める児童生徒像の明確化・共有化

児童生徒の実態を把握し、改善内容や方針について学校、家庭、地域が共に話し合うために、顔を合わせて協議する場を設定する。

② 役割の分担と協力

児童生徒の発達段階を考慮しつつ、互いの教育環境や教育機能を生かし、目標達成に向けての具体的な取組を明文化、宣言する。

③ 継続性・組織性

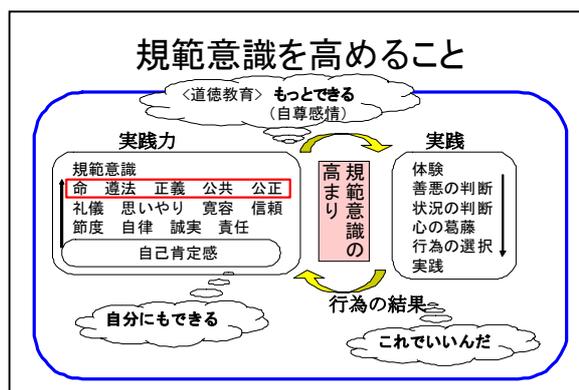
個人的、単発的活動ではなく、組織的に一体となった継続的に取り組む。

④ 相互の成長

互いの取組を公開することで自己変革のきっかけとする。連携することが相互の学び合いとなり、そうなることが継続性を高める。

相互連携とは、学校・家庭・地域が目標を共有し、目標達成のために、それぞれの役割を認識し、組織的継続的に協力して行うこと。

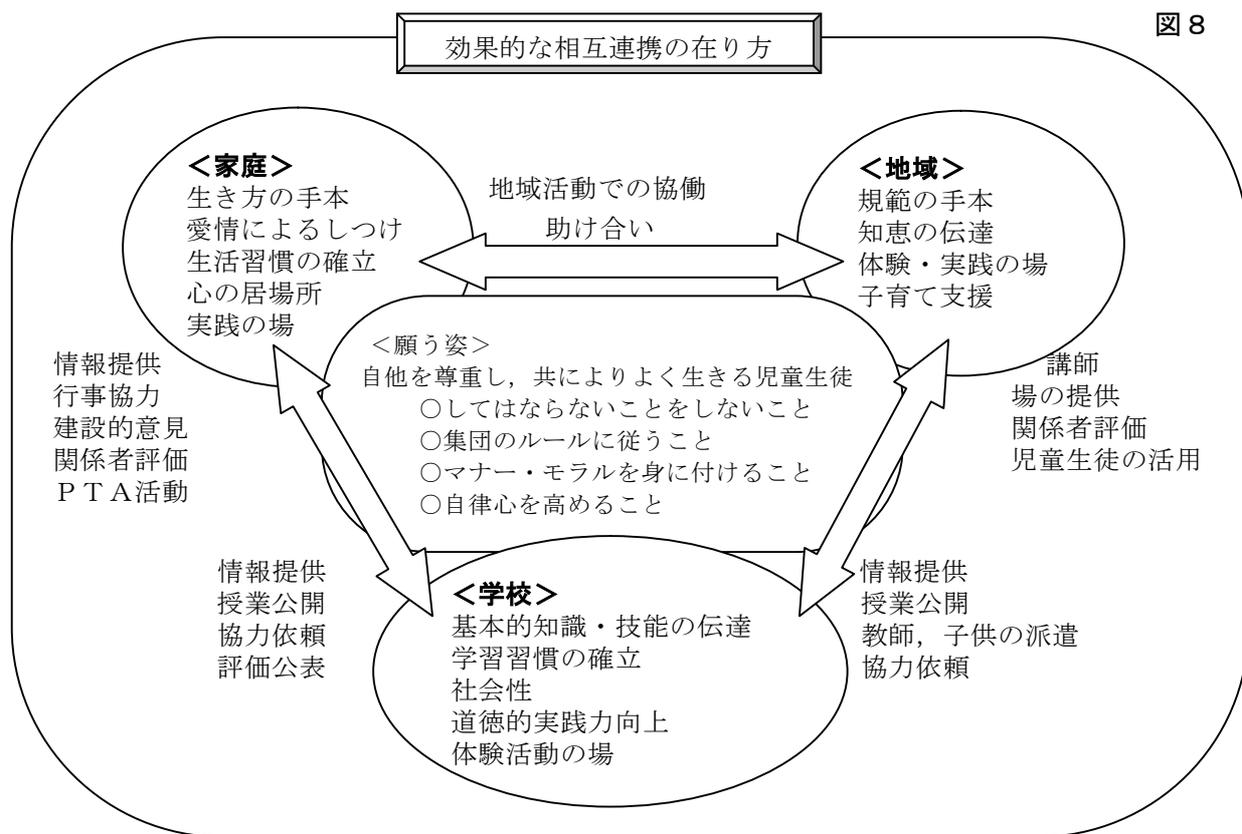
例えば、保護者や地域に情報提供をしたり、ゲスト・ティーチャーを講師として活用したりすることは連携の始まりである。そこから、常に情報が交換できる体制を整備したり互いの意見を交わしたりしながら、目標達成のために組織的・継続的に協力する連携が期待される。特に、規範意識を高めるためには、児童生徒の発達段階に応じて、それぞれの立場で効果的に働き掛けることが重要である。学校・家庭・地域が正しい規範モデルを示すことで、周囲に同調しやすい時期にある児童生徒の規範意識の混乱を軽減させ、望ましい規範へ意識を高めることができる。と考える。(次頁 図8)



(3) 児童生徒や保護者の思い

平成16・17年度文部科学省委嘱による「義務教育に関する意識調査」(ベネッセ)によると、小学校・中学校調査において「学校生活で身に付ける必要がある力」として、児童生徒自身が「よいことと悪いことを区別する力」「まわりの人と仲よくつきあう力」を選択している割合が上位二つに入る。保護者調査においても、「学校外の教育で身に付ける必要性が高い能力・態度として、保護者は「善悪を判断する力」「社会生活に必要な力」を選択した割合が上位二つに入り、9割に迫る勢いである。

児童生徒と保護者，教師の三者に加え，学校評議員など学校外部からも要請が強く，規範意識をはじめとした道徳性をはぐくむことは，社会全体の願いである。



10 平成 21 年度の取組

本年度は実践研究 1 年次に当たり，学校の実情に応じながら，効果的な相互連携の実践に加えて，校内の指導体制の構築や規範意識を高めるための指導法も充実させるために，研究主題と副題を次のように考え，実践を重ねている。

- | | |
|--------|---------------------------------|
| < 主題 > | 規範意識を高める学校・家庭・地域の相互連携の在り方に関する研究 |
| < 副題 > | — 学校・家庭・地域の相互連携を核とした道徳教育の推進 — |

道徳教育推進教師(これに準ずる生徒指導主事等も含む)を中心にして，道徳教育全体計画に位置付けられた実践を通して効果的な相互連携の在り方を，児童生徒やその保護者，教師の変容から探る。

(1) あま市立甚目寺西小学校

道徳教育を教育活動の中心に据えている。一人一人の規範意識を醸成しモラル向上を目指す中で，人としてどう生きるべきかを考える力を育てることに重点を置いた。そして，「思いやりのある言動がとれる子」「きまりを大切に生活ができる子」の二つを，目指す子供の姿とした。三つの部会を立ち上げ研究を進めた。一つ目は授業研究部会で「共感したり違いを認め合ったりする授業の工夫」，二つ目が体験活動研究部会で「心をたがやす豊かな体験活動の工夫」，三つ目が連携推進研究部会で「心の根っこが育つ家庭・地域との連携推進活動の在り方」をそれぞれ研究している。

(2) 豊橋市立岩西小学校

地域とかかわることで思いやりの心や公共心を高めることをねらいとして研究している。そのために，いのち・交流・生き方の三つの要素を重視した生活科と総合的な学習の時間における単元の展開を工夫する。手だてとして①体験活動の時間を多く設定する。②道徳や社会科との関連を図る。③目

的意識をもって何度もかかわる。④話す・聞く・伝え合う活動の充実を考え、実践を行っている。その結果、子供たちは、総合的な学習の時間で地域の外国人と接することにより、考え方や文化など、多くの違いがあることを実感しはじめている。

(3) 武豊町立武豊中学校

規範意識を高めるために学級でできる活動を研究の中心としている。「集団や社会の規範意識を高くする要因」と思われる「自己肯定感・集団への所属意識」をより確かなものにするすることで、規範意識の向上を目指す。その手段として、「心のノート」を活用した道徳の授業や学級経営の実践をし、規範意識向上に結び付く「考え方」を身に付けさせ、家庭や地域でそれを実践していく意欲を高めていくことを目指し実践している。

(4) 刈谷市立朝日中学校

まごころをもち心身ともに健全で、地域から愛される生徒を育成するために、道徳教育の年間指導計画を見直し、かかわり合いを大切にした道徳の時間を計画的に実施した。豊かな心を育てる体験活動を実施し、道徳の時間との関連をもたせたり、学校・家庭・地域とのふれあいを深める活動を実施したりした。その結果、生徒は学校や社会のルールを守ろうとする姿勢がみられ、規範意識の高まりが感じられるようになってきた。今後は「おやじの会」の活動については、生徒の規範意識をより高められるよう、保護者の思いを大切にしながら目標を共有化し、継続化を図りたい。

(5) 愛知県立守山高等学校

今回の新学習指導要領から、道徳教育の全体計画を作成することが義務付けられ、学校はどのようにして生徒の道徳性、社会性を養っていったらよいか急務の課題となってきた。そのため、生徒の現状を踏まえ、生徒の人間関係形成能力を育成すること、また、自己実現に向けた意志決定能力を身に付けさせることをねらいとした。総合的な学習の時間や各教科における道徳の在り方、地域で体験する実践活動の在り方を中心に研究し、地域社会と触れ合う機会を通して生きるための実践的な力を育てる活動を積極的に行っている。

(1)から(5)の詳細については、各学校の実践のページを参照

11 おわりに

規範意識に関する実態調査を実施し分析を進めながら、規範意識を高めるための学習内容や指導法、学校・家庭・地域の効果的な相互連携の在り方を探ってきた。家庭や地域の人とのかかわりを意識した実践の中で、児童生徒は、人の思いや温かさに触れ、人にかかわることのよさを実感している。そして、自己肯定感を高めながら、学校や地域の一員としての役割や責任を自覚し始めている。

それぞれの実践を深めるために、既存の委員会を広げたり新たな連携委員会を設置したりして、相互連携に取り組んだことで、児童生徒の変容に加え、保護者や地域からは児童生徒に関する声が学校へ寄せられつつあり、大人の視線が児童生徒へ向けられるようになった。

まだ、学校主導の連携であり、今後、保護者や地域からの声や要請にもこたえつつ、課題に対して共に取り組み、相互にとって有益となるよう研究を深めていく必要がある。

思いやりの心を持ち、共に生きようとするにっこの育成

—道徳の授業や体験活動の工夫と家庭・地域との連携を通して—

あま市立甚目寺西小学校 鈴木 文博

1 はじめに

本校は、昭和 55 年甚目寺小学校より分離、独立し本年度開校 30 周年を迎えた。現在、学級数 14、児童数 351 名という学校規模である。本校が位置する甚目寺町は、名古屋市の西隣に位置している。平成 22 年 3 月には、美和町、七宝町と合併し「あま市」になることが決まっている。地域には、甚目寺観音をはじめとする文化遺産のほか総合体育館、総合福祉センター、児童館など公共施設にも恵まれ、それらを利用して人々が触れ合う姿がよく見られる。

「モラルの低下」と最近よく耳にする。人の生活は豊かで便利になったが、その一方で個人の自由や権利を主張するあまり、周りの人への思いやりの気持ちが置き去りになってしまった。その結果、人と共によりよく生きるために必要な規範意識が薄れ、これがモラルの低下の要因となっている。子供たちはそのような社会で生まれ、生活をしている。

私たちが生活する社会は、個人と個人がかかわり合いながら生活を共にするところに成り立っている。それは、「社会生活上のルールを守りマナーを身に付けることが大切である」といった価値観を共有することで、よりよく維持されているのである。本研究では、子供たちが安心して夢や希望を語り、自分らしく明るく生きる未来を切り拓いていくために、一人一人の規範意識を高め、人としてどう生きるべきかを主体的に考える力を育てる道徳教育を推進していく。

2 研究の目的

本校の子供たちを見ていると、分かっているはずの校内のきまりや生活目標が行動に表れてこない場面に出あうことがある。これは、ルールを守ることですがすがしい気持ちになったり、そのような自分に価値を見いだしたりする経験に乏しいためだと考えられる。このような子供たちの実態から、ルールを与えるだけでは規範意識は育たず、ルールを守り、マナーを身に付けることで自分たちの社会は維持され人としてよりよく生きられる、という真の意味を子供たちに体得させる必要性が見えてきた。自分、友達、周りの人、地域、社会を大切に思う気持ちがなければルールは守れない。だからこそ、多様なかかわりを通して、自他を大切にし、人をやさしく思いやる気持ちを育てていくことで、規範意識を高めていきたい。

3 研究の方法

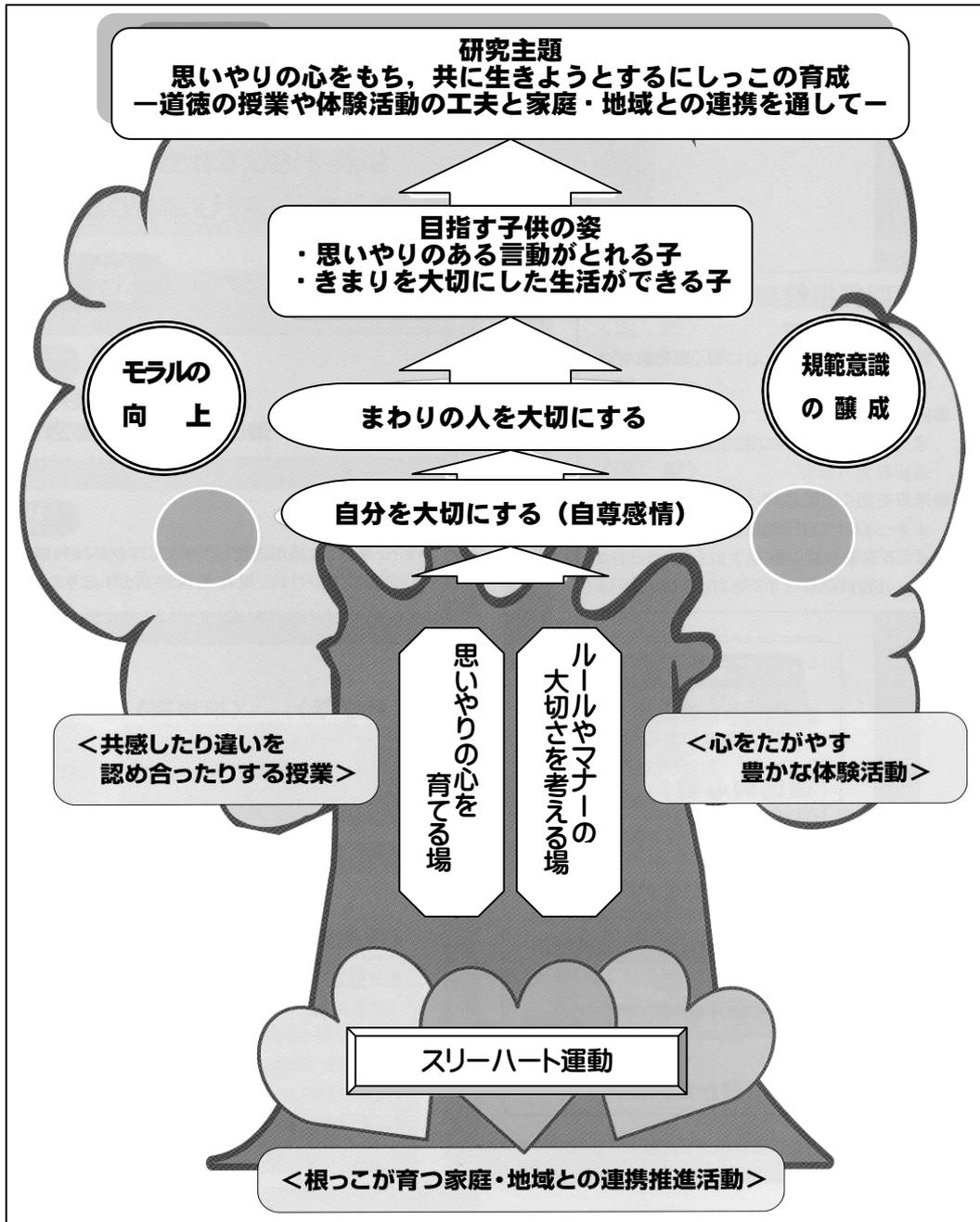
本校では研究テーマ実現のために、道徳教育を教育活動の中心にすえ、道徳の時間に行う「道徳の授業」、他と触れ合うことで今まで気付かなかった自分のよさや友達のよさに気付かせてくれる「体験活動」、家庭・地域と連携して道徳教育を実践する「連携活動」の三つを柱として研究を進める。

そして、「きらりにしっこ」と題して目指す子供の姿を次のように設定した。

きらりにしっこ

- ☆ 思いやりのある言動がとれる子
- ☆ きまりを大切にしたい生活ができる子

(1) 研究構想図



(2) 共感したり違いを認め合ったりする道徳の授業の工夫

- ア 生活目標や行事、体験活動と関連付けた年間指導計画を作成する。
- イ 1時間の授業の組立て方を工夫する。
- ウ 伝え合う力を育てる。（話し合いのスキルを高める時間を設定する）

(3) 心をたがやす豊かな体験活動の工夫

- ア 異学年交流活動、児童会活動、勤労生産活動の内容を見直し、充実を図る。
- イ 日常実践活動を推進する。

(4) 根っこが育つ家庭・地域との連携（スリーハート運動）

- ア 地域清掃（にしっこクリーンキャンペーン）を計画し、実施する。
- イ 相互理解を深める啓発活動を推進する。
- ウ 図書ボランティアと連携した読書活動の充実を図る。

エ モラル委員会を設置する。

4 研究の内容

(1) 共感したり違いを認め合ったりする道徳の時間の工夫

ア 年間指導計画の作成

毎年、前年度の反省を基に、資料を見直し、体験活動や地域連携活動との関連を考え、指導計画を作成している。指導内容の系統や発展を表した表や内容項目ごとの一覧表も併せて作り、他学年との関連が分かるように、全学年分を冊子にして活用している。身近において使いやすいように、各学年、学期ごとに1枚にまとめ、資料や道徳プリントを計画的に作ることに役立てている。今年度は新学習指導要領の指導内容に併せて改訂した。

新学習指導要領で改訂された内容項目

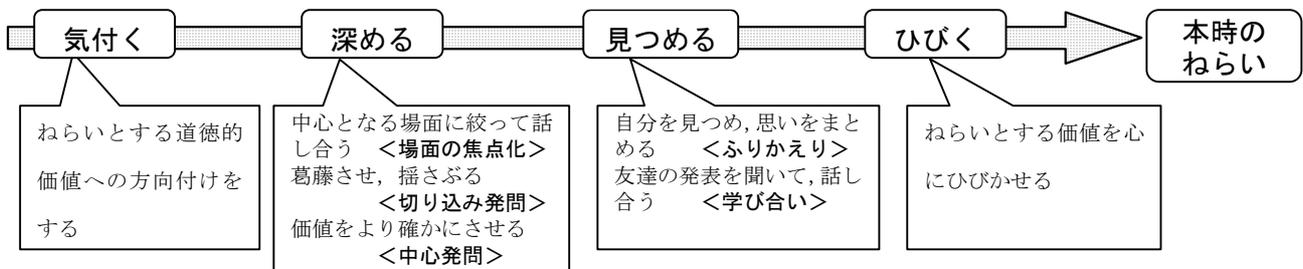
学校行事と関連させた内容

月	主 題 名	内 容 項 目	心 の ノ ー ト	体 験 活 動	地 域 連 携	生 活 目 標
9	たった一のキャベツから【文】	2-(1) 礼 儀	礼ぎ一形を大切に心をかよわせ合う			き身のまわりのまわりをしよう
	学校自まん集会	4-(4) 愛校心	学校はどんなところ？	☆スポーツフェスティバル		
	伊良湖の書道家	1-(5) 個性の伸長	自分のよいところはどこだろう？			
10	お母さん泣かないで【文】	3-(1) 生命の尊重	生きているってどんなこと	交通安全教室		うしっかりとそうじをしよう
	おばあさん	2-(2) 思いやり・親切	思いやりの心をさがそう		親子読書	
	お手づたい	4-(2) 勤労	みんなのために流すあせはとても美しい	芋ほり収穫祭		
	こわされたタワー	2-(2) 思いやり・親切	思いやりの心をさがそう	わくわくタイム		
11	森がすき【文】	3-(2) 自然愛・動物愛護	植物も動物もともに生きている			落ち着いて生活しよう
	ぶち合わせたいこ【文】	1-(2) 勤勉・努力、不とう不屈	「今よりよくなりたい」という心をもとう	学習発表会		
	雨より強い子	1-(1) 節度・節制、自立、思慮	よく考えることがあなたをもっとのびす			
	プレゼント【文】	4-(3) 家族愛	わたしの成長を温かく見守り続けてくれる人…家族			
12	しあわせの王子【東】	3-(3) 敬けん	自然の美しさにふれて	人権週間		う2学期をふり返る
	火事	2-(4) 尊敬・感謝	みんなにささえられているわたし			
	生けがきのせんてい	1-(4) 正直・誠実、明朗、反省	自分に正直になれば、心はとても軽くなる			

イ 授業の組立て方の工夫

道徳の授業を下図のような組立てで実践している。ポイントを絞って話し合うことで、子供たちは、自分の気持ちを素直に話し、よりよく生きていくためにはどうするとよいか考えることができるようになってきた。今年度は、子供たちの考えを深める学び合いに重点を置いて取り組むことにした。また、ゲスト・ティーチャーを招いて、子供たちの心に思いが響くような工夫をした。

道徳の授業の組み立て



ウ 授業実践

(7) 2年生「えんぴつは なんさい」（「2年生の道徳」文溪堂 1-(1) 節度、自制、自立）

気づく

学校や教室に落ちていたハンカチや鉛筆などを見せることによって、身近な問題としてとらえさせ

た。まだ使える物や名前が書いてないために持ち主に届けることができない物などがあることを知らせ、ねらいとする価値につなげることができた。

深める

切り込み発問として、祖父に鉛筆は71歳だと聞いたときの主人公の気持ちを考えさせたことで、鉛筆に年齢などないと思っていた主人公の気持ちの変化を感じ取らせることができた。「けずりすぎてみじかくなったえんぴつ」をキーワードにして場面を焦点化することで、話し合うポイントを絞り考えを深めることができた。また、子供たちは、場面絵があることで、主人公の気持ちの変化を感じ取って、価値の追求、把握をすることができた。

見つめる

自分自身の経験を振り返り、身の回りの物で大事にしてきた物を思い出し、どんな気持ちで使えばよいか考えさせた。ここでは、友達の発表を聞き学び合うことで、自分では気付かなかった物にも目を向けることができ、身の回りには大切にしなければいけない物がたくさんあることに気付くことができた。

ひびく

トルコから体験入学に来ていた子供の母親をゲスト・ティーチャーとして迎え、その子が使っている本やランドセルは、

第2学年1組 道徳指導案 平成21年□月□日 (□) 第2時限 2の1教室 指導者 ○ ○ ○ ○		
1	主 題 えんぴつは なんさい	1 - (1) 節度, 自制, 自立
2	本時のねらい 身の回りのものを大切に使う気持ちをそだてる。	
3	本時の意図 物や金銭を大切に、身の回りを整頓して生活することは、基本的な生活習慣であり、これは、生涯にわたって行動の規範となる。子どもたちの学用品を見ると、新しいものになっていることが多く鉛筆や消しゴムを最後まで使おうとしている子は少ない。物に対する愛着が強い子とそうでない子の違いがはっきりしている。ふだん何気なく物をむだに使ったり粗末に扱っている子どもたちに、主人公の気持ちに共感させ、物を大切にすることを育てたい。	
4	準備・資料 ・教師 場面絵 カード 大切に使った本やランドセル	
5	指導過程	
段階	学 習 活 動	指導上の留意点・支援 評価
気 付 く 5分	1 落とし物を見た感想を発表する。 ○ 名前が書いてない。 ○ 消しゴムが多い。 ○ まだ使える鉛筆がある。	・ 落とし物の中には、落とし主の現れない物がいくつかあるので、その実物を示し、感想を聞き、本時への方向づけとする。
深 め る 25分	2 資料「えんぴつは なんさい」を読み、話し合う。 (1) どんな気持ちで鉛筆を削っていたか話し合う。 ◇切り込み発問 (2) 「おじいさんから話を聞いてたかしさんは、どんなことを思いましたか。」 ○ 鉛筆ができるまで71年もかかるんだ。 ○ 切ってから1年もかかるんだ。 ◇中心発問 (3) 「削りすぎて短くなった鉛筆を見つめるたかしさんは、どんな気持ちでしたか。」 ○ なにも考えないで削っていたなあ。 ○ 削りすぎてごめんね。 ○ これからは大切に使うよ。 ○ 最後まできちんと使おう。 ○ ほかの物も、大切に扱わないといけない。	・ 場面絵を見せ、たかしの表情や「おもしろいように」「どんどん」という言葉などからむだに削っているたかしの気持ちを考えさせる。 【キーワード】「だから、71さいなんだね」 ・ 身近な鉛筆が、樹齢70年以上の木から作られることを知って、驚いているたかしの気持ちを考えることで、中心発問での気持ちの変化やねらいとする価値に迫りたい。 【キーワード】「けずりすぎてみじかくなったえんぴつ」 ・ たかしの表情の違いを、場面絵から押さえ、気持ちの変化の気づかせる。 ・ 物を大切にできなかった自分の行為を反省しているたかしの気持ちに目を向けさせたい。 資料から、作られるまでのことも考えることで物を大切に使うという気持ちをもち、どうしたらよいか考えることができた。 〈道徳プリント・発言〉
見 つ め る 10分	3 これからの自分を見つめる。 ○ 身の回りの物で、大事にすればもっと使えそうな物はありませんか。また、どんな気持ちで使えばよいでしょう。	・ 学用品以外の物にも目を向けさせる。 ・ いろいろな場面で、物を大切にすることを考えさせる。 自分自身の経験をふり振り返り、身の回りにある物を大切に使うという気持ちを高めている。 〈道徳プリント・発言〉
ひ び く 5分	4 大切に使った本やランドセルなどを見せ、物を大切にすることについて、ゲストティーチャーの話を聞く。	・ 次に使ってくれる人のことを考え、物を大切に使った人の気持ちを感じ取らせ、実践への意欲につなげたい。
6	反 省	
7	高 評	



【授業の様子】

いとこや近所の子が大事に使った物であることを話してもらったことで、物を大切に使うという気持ちが高めることができた。

(イ) 6年生の実践 「サマーボランティア」 (「明るい心」 4-(4) 勤労, 社会奉仕, 公共心)

気付く

ボランティア活動をしている人の写真を見せ、ボランティア活動について知っていることを発表させることにより、ねらいとする価値の意識付けを図った。

深める

一人暮らしのおばあさんにお弁当を届ける仕事を通して主人公がボランティアとしての大切な考えに気付いた場面で、主人公の心の動きを考えることにより、社会に奉仕することの意義を考えさせた。また、社会に奉仕することは、他の人に喜びを与えるだけでなく、自分の喜びとなることにも気付かせるようにした。

見つめる

学習したことを基に、「心あったか集会」などを振り返り、今までの自分は委員会活動や学校の仕事などにどのように取り組んできたかを見つめさせ、学んだ価値をこれからの生き方につなげて考えさせた。

ひびく

校長先生をゲスト・ティーチャーとして迎え、通学団や異学年交流活動などで、最高学年として学校のみんなのために活動しようとする気持ちをより高めることができた。今後の活動につなげるとともに、ねらいとする価値がさらに心に響くようにさせた。

第6学年1組 道徳指導案 平成21年□月□日(□) 第3時限 6-1教室 指導者 ○ ○ ○ ○		
1 主 題 サマーボランティア 4-(4) 勤労, 社会奉仕		
2 本時のねらい 社会に奉仕する大切さを理解し、みんなのために役立とうとする意欲を高める。		
3 本時の意図 一人暮らしのおばあさんにお弁当を届ける仕事を通して、ボランティアに対する大切な考えに気づいた主人公の心の動きを考えることにより、社会に奉仕することの意義を考えさせたい。また、社会に奉仕することは、他の人に喜びを与えるだけでなく、自分の喜びとなることにも気づかせたい。		
4 準備・資料 ・教師 場面絵 図書ボランティアの読み聞かせの写真		
5 指導過程		
段階	学 習 活 動	指導上の留意点・支援 評 価
気付く 5分	1 ボランティアについて、知っていることを発表する。 ○ 図書ボランティアの人に読み聞かせをしてもらっている。	・ テレビや新聞のニュースなどから、ボランティアについて知っていることを発表させ、本時のねらいとする価値の意識づけをはかる。
深める 10分	2 資料「サマーボランティア」を読んで、話し合う。 (1) 一人暮らしのお年寄りについて簡単に話を聞く。 ◇切り込み発問 (2) 「「1回くらい休んでもいいじゃないか」と言った時、博史さんはどんなことを思っていたでしょう。 ○ たまには、休んでもいいじゃないか。 ○ 友達と野球をする約束をしてしまったから、休みたい。 ◇中心発問 (3) 「しっかりとした足どりで、おばあさんの家を後にしたとき、博史さんはどんなことを考えていたのでしょうか。 ○ おばあさんを元気づけることができうれしい。 ○ 中学生になっても続けよう ○ ボランティアっていうのは、弁当を届けるだけでなく、元氣も届けているんだ。 ○ 人の役に立つ仕事ができよかった。	・ 一人暮らしのお年寄りの不自由な生活について知らせ、資料への興味づけをする。 キーワード 1回くらい休んでもいいじゃないか キーワード しっかりとした足どりで ・ 博史の行為を通して、ボランティアは物を届けるだけではなく、気持ちや心を届けることでもあることや、人の役に立つ仕事をする喜びにも気づかせたい。 資料から、社会に奉仕する大切さを理解し、ボランティアに対する大切な考えに気づくことができたか。(道徳プリント・発言)
見つめる 10分	3 今までの自分をふり返り、みんなのためになる仕事をしたことを話し合う。	・ 最高学年としてみんなのために働くことにより、仕事を成し遂げた成就感や役に立った満足感を味わったことを発表させる。 ・ 自分は社会の役に立つ存在であることを自覚させ、みんなのために役立とうとする意欲を高めたい。 自分自身の経験をふり返り、みんなのために役立とうとする意欲を高めたか。(道徳プリント・発言)
ひびく 5分	4 校長先生の話聞く。	・ 通学団や異学年交流活動などで、学校のみんなのためにしている活動が認められている喜びを味わわせるとともに、今後の活動につなげたい。
6 反 7 高	省 評	

エ 伝え合う力の育成（話し合いのスキルを高める時間の設定）

道徳の授業で「共感したり違いを認め合ったり」するためには、子供たち一人一人の伝え合う力を育てなければならない。そこで、毎週火曜日の業前に5分間「話し合いスキル」の時間を設定した。話し合いの技能を鍛える場として位置付け、「話し手」と「聞き手」の両面から、ねらいをもって取り組めるように、低・中・高学年別に内容を工夫した。

さらに、「聴く」意識を育てるために人の話を聴くときの心構えや、声の大きさを意識させる「声のものさし」を掲示していろいろな場面で心掛けさせた。

(2) 心をたがやす豊かな体験活動の工夫

体験活動は、今まで気付かなかった自分の良さや友達の良さに気付かせてくれる大切な場である。人とのつながりの大切さを体得させ、周りの人の気持ちを考えて行動できるやさしい気持ち、思いやりの心を育てることが規範意識を高めることにつながっていくと考え、実体験を中心とした活動を進めた。

ア 異学年交流活動

本校では、異学年交流活動を「わくわく活動」とよんでいる。計画を立てるに当たっては、

目標⇒啓発⇒活動・体験⇒振り返り⇒学び合い

という流れで活動を進めている。リーダー・サブリーダーを中心に、イモの栽培、わくわくタイム、にこにこランチなどいろいろな活動を通して、異学年の交流を図っている。これまでの積み重ねにより、高学年児童は自覚をもって低学年の子の世話をしたり、やさしく接したりすることができるようになってきている。また、低学年児童は高学年の子を慕い、教えてもらうことを喜び、楽しく活動に参加している。

振り返りや学び合いでは、自分自身のがんばりや仲間の良さに気づき、互いに認め合うことができた。振り返りカードは、各自「にしっこファイル」として記録を残している。

イ 児童会・委員会による集会活動(心あったか集会)

児童会役員と図書委員が運営委員となり、「思いやり」をテーマに全校集会を企画した。7月の集会に向けて、5月の半ばぐらいからめあてや内容などを検討し、協力して主体的に話し合いを進めてきた。

思いをふくらませる（目標）

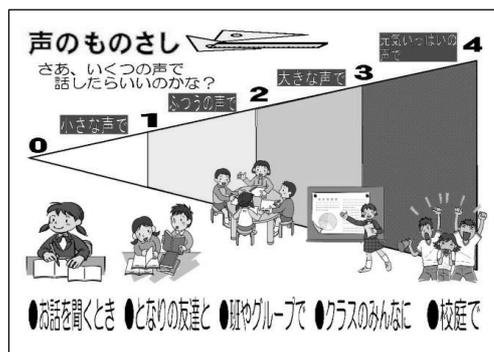
運営委員は、人とかかわることのよさや大切さを伝えていくことを目指して、集会の目標を、

- ・ 読み聞かせやゲームなどを通して、相手のことを考え、思いやりの心を広げよう。
- ・ 相手の気持ちを考えることの大切さに気づき、楽しく活動しよう。

と決め、「心あったか集会」というネーミングを考えた。



【話し合いスキルの様子】



【声のものさし】



【イモ掘りの様子】

また、思いやりの大切さに気付く「本の読み聞かせ」や思いやりについて考える「心ふわふわタイム」、友だちと触れ合う「仲間を集めようゲーム」を計画した。

思いを表す（啓発と体験）

事前に朝礼や児童会だよりなどで集会に臨むめあてを全校に知らせ、見通しと目的意識をもって活動できるようにした。

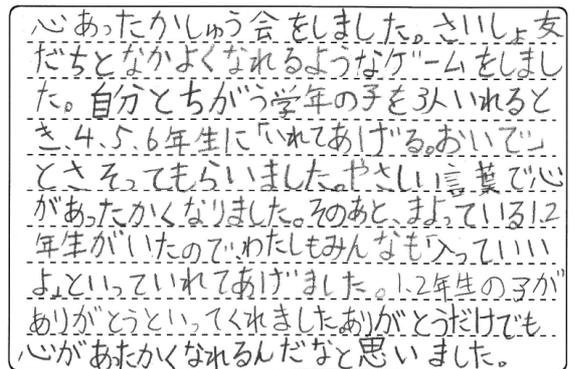
集会では、運営委員が熱意をもって取り組み、それぞれの役割を果たしたので、参加した子供たちも楽しく活動することができた。また、インタビューによる学び合いの場では、思いやりについての友達の感想を聞き、気持ちを共有することができた。



【心あつたか集会の様子】

思いをあたためる（振り返りと学び合い）

集会後、自分なりに気付いたことや感じたことを振り返りカードに記入することにより、思いをあたため、自分の生活に結び付けて考えることができた。また、振り返りカードを道徳コーナーに掲示したり、放送で紹介したりして学び合いの場を広げた。



【振り返りカード】

ウ 日常実践活動の見直し

(ア) 生活目標の見直し

より具体的な目標を考え、各学期、「重点目標・願う子供の姿」を設定した。

(イ) 児童委員会の活動

各委員会とも、親しみやすい別の呼び名を考えた。また、常時活動のほかに「思いやり・きまりを大切に」をテーマとした集会やキャンペーン活動を計画し、全校児童への啓発を行った。

【活動例1】にしっこレンジャー（生活委員会）

- ・ きまりをきちんと守って生活している子や友達の手助けをしている子などを、「きらりにしっこ」として、朝礼時に紹介している。
- ・ 「時間を守ろうキャンペーン」などの実施

【活動例2】ピカピカ隊（美化委員会）

「1秒でできる〇〇」というキャッチフレーズの下、運動を展開し、「1秒でできる整とん」を合い言葉に靴の整頓を呼び掛けた。整頓の状況に応じて画用紙の色を赤→黄→青と変えることによって啓発活動を推進した。さらに、「1秒でできる思いやり」を合い言葉に、トイレのスリッパの整頓を呼び掛けた。



【きらりにしっこの紹介】

(3) 根っこが育つ家庭・地域との連携推進活動

子供たちの規範意識を高め、モラルを向上させるためには、地域社会が道徳教育に果たす役割を十分に認識し、学校が家庭・地域と連携し、地域全体で子供たちの心に響く道徳教育を展開していくことが大切である。そこで、学校・家庭・地域が一体となって、ゆるぎない心の根っこを育てる活動「スリーハート運動」を推進していくことにした。

ア 地域清掃（にしっこクリーンキャンペーン）

5月30日のごみゼロ運動の日にあわせて、子供が汚れている場所やいつもお世話になっている施設を、地域の人と一緒に清掃することを話し合った。活動に意欲的に取り組むために、異学年グループのリーダーが、学年に合った作業を考えた。そして、清掃活動の場所・時刻・持ち物などのチラシを作り、地域や家庭に投函し、協力を呼び掛けた。

当日は、保護者のボランティアや地域の方々の協力を得て、草取り、落ち葉拾い、遊具拭き、歩道橋の階段掃除、児童館のじゅうたんのごみとりなど進んで行うことができた。地域の人と一緒に清掃したり、ごみ袋にたくさんの草が集まったりして、一人一人が「みんなできれいにしてよかったな」と感じる事ができた。

さらに、この活動を通して「甚目寺町を少しでもきれいにできた」「これからも続けていきたい」とみんなのために役立とうという気持ちも育った。



【地域の人も一緒になって草取り】

イ 相互理解を深める啓発活動

(7) スリーハート運動の親子標語作成

学校・家庭・地域が協力し合ってモラル向上をはかる「スリーハート運動」への関心を高めるため、夏休みに親子で一緒にスリーハート運動の標語を作成した。たくさんの応募の中からあいさつ・清掃と美化・地域に関する標語を3点選び、学校や地域に掲示し、地域のモラル向上の啓発活動を行っている。掲示活動は児童会役員と6年生児童が中心になって行い、公共施設や地域の店など掲示してほしいところを話し合い、依頼に行った。標語は建物の入り口などに掲示してもらい、子供たちだけでなく、地域の人にもモラル向上を呼び掛けている。



【町長さんに親子標語の掲示を依頼】

(4) 道徳通信「スリーハート」の発行

地域全体で子供たちの道徳性を培うため、三者が互いに情報を共有し、地域の道徳教育推進活動を啓発することをねらいとして、月1回道徳通信を発行している。道徳通信などを通して、道徳教育の意義やねらい、児童の実態や活動の様子を紹介することで、家庭や地域の人々の理解を深められると考えている。また、学校からの一方通行にならないように、保護者や地域の人々の考え等を掲載して交流をはかり、子供たちのモラル向上について、共に考えてもらうように啓発した。

項目町立西小 道徳通信 第2号
平成27年 5月27日

子どもたちと一緒に是非ご参加下さい!!
ピカピカ甚目寺ごみゼロ運動
5月29日(金) 13:25~14:30
6月5日(金) 13:45~14:10

みんなの甚目寺町をこのくらいピカピカの町にしよう!!
ご協力いただける方は、下記のお近くの場所にお越しください。

清掃場所
*新田神社(法性寺の裏)
*302号沿い東側 二徳堂前~グランレイム甚目寺!!
*170~クレーン社(ヨネダアラシ家)
*新田屋敷4号子供広場(新田屋敷)
*新田屋敷4号びっ子広場(マノン・ド・ジボアール北)
*302号歩道橋(ヨネダアラシ家)
*学校前歩道橋
*学校前歩道橋

いもの苗植えをしました
5月15日(金)に異学年交流活動の取り組みとして、いもの苗植えをしました!!苗植えを行うまでに、たくさん地域の方々に恩の言葉をかけていただきました。そのおかげで簡単に苗植えが出来ることができました。ありがとうございました。
今年もおいしいいもがたくさんでできるといいます

家族学級のお知らせ
6月13日(土)
*道徳授業公開 9:15~10:00
*家族委員会 10:15~11:15
*演目「100万生きた猫」
~劇団たんぽぽ~

【道徳通信「スリーハート」】

(4) 図書ボランティアと連携した読書活動の充実

本校では、保護者を中心とした地域の人が図書ボランティアとして、読み聞かせや図書館の整備などの活動を行っている。本を通じて、子供たちの想像力を伸ばし、豊かな心をはぐくむとともに、地域の人が子供たちと触れ合い、共感できる時間をつくりたいと考えている。毎月2回、「朝の読書タイム」の時間に行われる読み聞かせも、活動が積極的になり、読み聞かせる本も、ねらいに応じて伝え

たい思いのはっきりしたものが選ばれるようになってきた。

ウ モラル委員会の設置

学校・家庭・地域の三者が一体となったモラル向上・規範意識醸成のためにモラル委員会を設置した。教職員，児童，保護者，地域の代表で構成し，学期に1回開催する。道徳教育のねらいや児童の活動について報告をした後，今後の地域連携活動の進め方について話し合いをもつ。意見を交換することで，道徳教育についての関心・理解を深めるとともに，保護者や地域の人の思いや願いを理解し，その意見を反映させることで開かれた道徳教育を推進し，教育活動の成果が高められると考えている。

5 研究のまとめと今後の課題

(1) 成果

ア 道徳の授業

道徳の授業で，子供たちは様々な道徳的価値に触れ，自分の生活に照らし合わせて考えることができた。道徳の授業を通して子供たちは，社会にはみんなが気持ちよく生活するために大切にしなければならないことがあることや，それが自分たちの生活をよりよく維持することを再認識することができた。そして，獲得した道徳的価値を大切にしたい生活ができる自分でありたいと願う子供が多くなった。

イ 体験活動

様々な体験活動を積み重ねることで，振り返りカードに自分のことだけでなく，周りの人への思いを綴ることも多くなった。これは，自分，友達，周りの人にやさしい気持ちをもつことができるようになったことの表れである。また，この気持ちが次の行動につながるようになった。

また，児童を主体にしたきまりやマナーについての呼び掛け，実践により子供たちの内面にモラルに対する意識の変容が見られるようになった。学校全体で，きまりを守り落ち着いて生活することができる子，そのような意識をもって行動する子が多くなった。また，子供たちの中から「『きらりにしっこ』になりたい」という声が聞かれるようになった。

ウ 地域連携

スリーハート運動を通して地域に「子供たちをこう育てたい」という思いを伝え，積極的に協力を呼び掛けた。その結果，少しずつ学校と共に子供の成長に寄り添い，力を貸してくださる方が増えてきた。さらに，甚目寺町全体にも広めようという動きも出てきた。学校，家庭，地域の連携協働体制を整えるための一歩を踏み出すことができた。

(2) 課題

スリーハート運動の推進は，まだまだ学校主導である。もっと地域からの声が学校に届き，それによって活動できるような体制を整えたり，地域全体で子供たちを育てていこうとする意識を高める働き掛けをしたりする必要がある。そのことが地域全体のモラル向上にもつながっていくと考える。

人として豊かに生きていくための道徳的な心情は，様々な体験を通して培われ，積み重ねられていくものであるが，すぐに実践力に結び付くとは限らない。今後もあらゆる場面で継続して子供たちに働き掛け，子供たちの心の成長や実践力を身につけていく過程を長い目で見守り，支援していきたい。



【図書ボランティアによる読み聞かせ】



【モラル委員会の様子】

地域とかかわり思いやりの心や公共心を高める子供の育成

～地域の人・もの・自然に学ぶ総合的な学習，生活科の授業を通して～

豊橋市立岩西小学校 稲田 あけみ

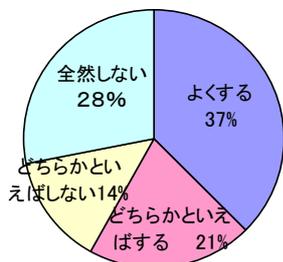
1 はじめに

岩西校区には、多くの団地や育成園、ゆたか学園などの福祉施設、学校に隣接している豊橋養護学校がある。また、ブラジルから日本に来たばかりの外国の子供たちがたくさん住んでいる地域でもある。そういう中で、様々な境遇の子供たちが出会い仲間づくりをするうちに、人なつっこい寛容な人間性が培われつつある。しかしその反面、相手の気持ちを深く考えない軽率な言葉を使ったり、みんなのものを大切にできなかつたりするところも見られる。「『ばかやろう』『ふざけんなよ』など、悪い言葉を使いますか」というアンケート（子供用）項目に対して資料 1 のように 33% の子供が「よく・たまに使う」という否定的な回答をしている。また、地域としてのつながりが希薄で同じ通学班の子供の名前を知らない保護者さえいる。

「子供会行事や地域行事，スポーツクラブなどに参加しますか」というアンケート（子供用）に対して資料 2 のように 28% の子供が「全然しない」と回答している。校区の運動会に参加しない町内もあるほど

子供会行事や地域行事，スポーツクラブなどに参加しますか

資料 2



である。

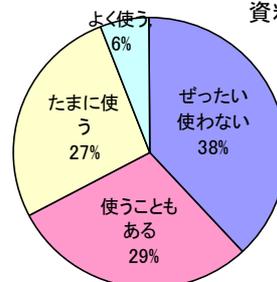
思いやりの心や公共心は、学校生活，家庭生活，地域社会等，子供を取り巻くあらゆる社会環境によってはぐくまれ、また、その中で規範意識は醸成されるものであると考えている。

本校は、本年度から 3 年間、市から地域連携の研究委嘱を受けたこともあり、子供たちが地域の人・もの・自然に学ぶ学習をすることで、地域の方や保護者の方々の「地域で子供を育てる」という意

識が高まっていくことを期待している。また、地域に愛着をもてる子供を育てたいと思う。子供たちが、地域に出て活動や体験をし、授業の中で話し合いを繰り返すことで、様々な立場の人たちと共に生きることの大切さを理解するであろう。それは自然に思いやりや公共心を高めることにつながると考える。そして、子供たちの学びが家庭や地域に広がり、学校と家庭・地域の連携が深まっていくことを期待する。

悪い言葉を使いますか

資料 1



2 研究の目的

- ・思いやりの心や公共心を高めるための総合的な学習の時間・生活科の在り方をさぐる。
- ・子供たちが地域へ出掛けることで、地域の方や保護者の方々の地域への愛情を高め、子供と共に校区の規範意識の向上を期待する。

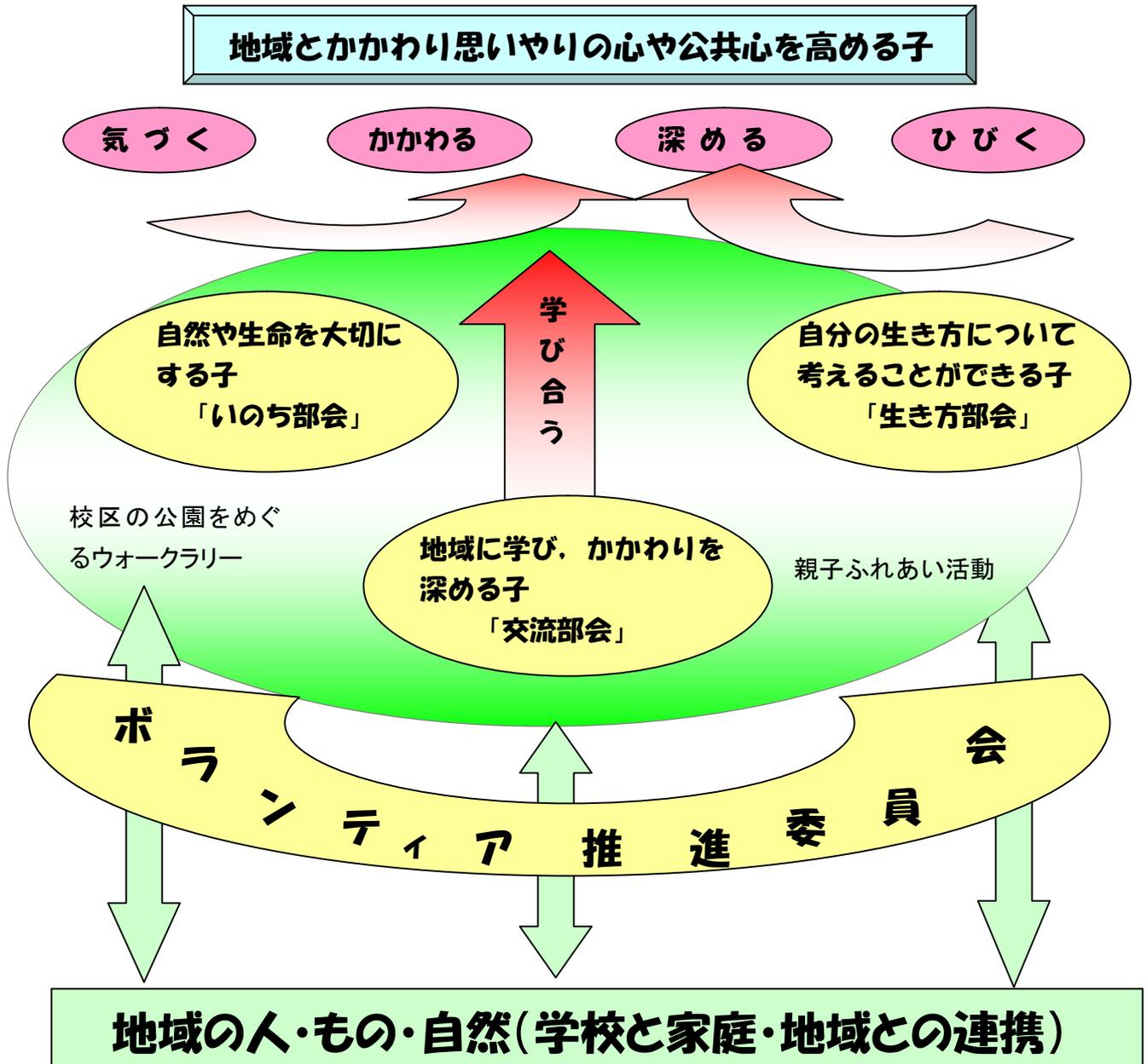
本研究では、地域への愛着が比較的薄い子供たちが、地域のもの・自然にふれたり、地域の方々から学んだりする総合的な学習の時間、生活科の学習をすることにより規範意識が高まることを期待する。単元構想には、道徳や社会科，特別活動を関連させることにする。思いやりの心や公共心を育てるために、どのような手だてが有効なのかを明らかにするのが本研究のねらいである。

3 研究の方法

本校は総合的な学習と生活科を軸にした教育活動を行うことで規範意識（思いやりの心や公共心）を高めようとした。そのために、いのち部会、交流部会、生き方部会の3部会を立ち上げ、それぞれの仮説に基づき手だてを講じる。その手だてを検証する立場で実践を行っていく。研究前の子供の規範意識、親の規範意識が、研究を通して向上してくるかどうか、アンケートの数値や振り返りカードの言葉から検証する。

子供は社会の中で育てられているのだから、地域の人やもの・自然と子供たちがかかわる場づくりをしたり、親子で活動する場を設定したりして規範意識を育てようと計画した。

(1) 研究構想図



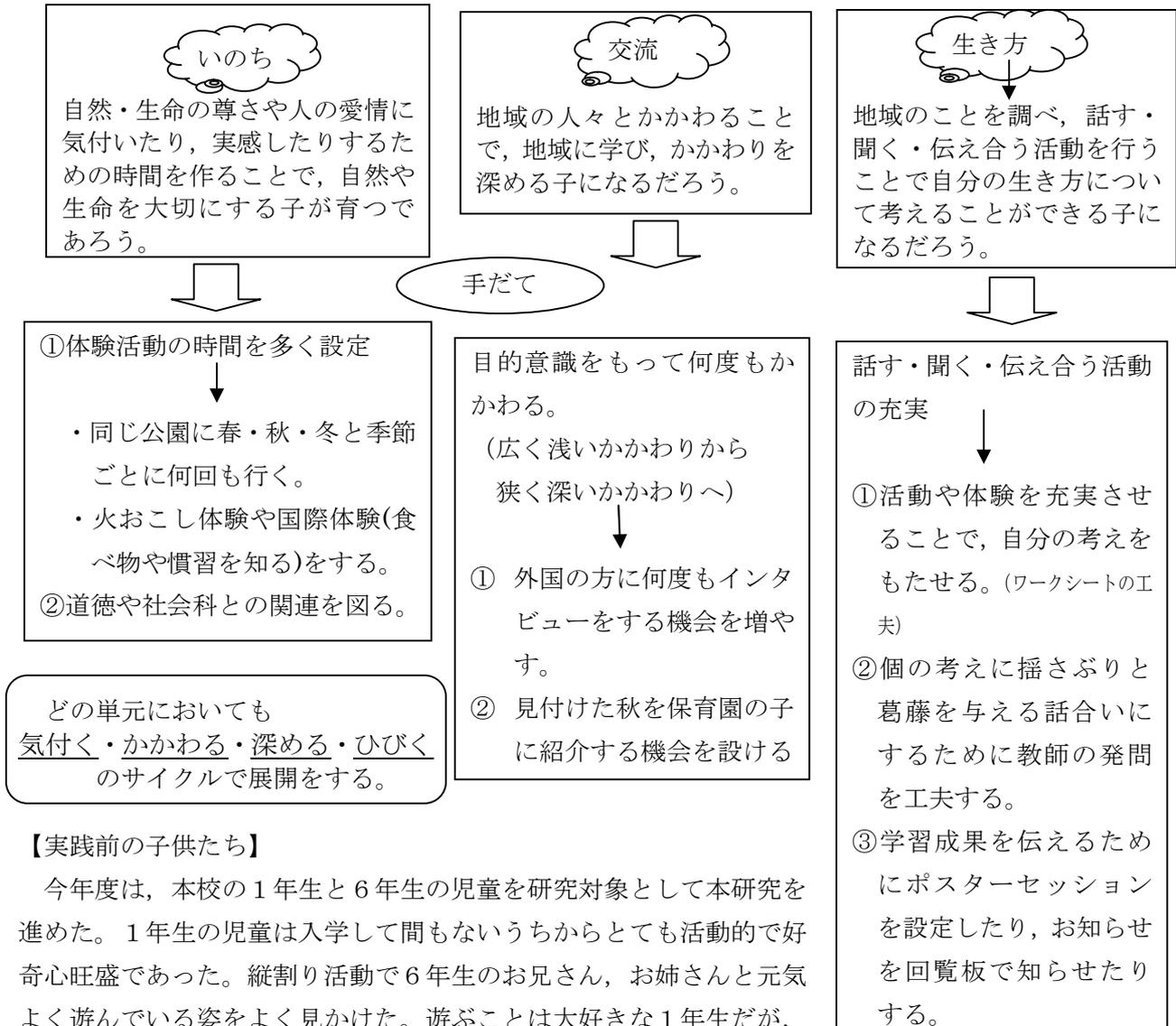
(2) 研究の仮説

子供たちが地域の人・もの・自然と進んでかかわり、いのち、交流、生き方の3つの要素を重視した単元の展開を工夫することで、思いやりの心や公共心が高まるであろう。

(3) 研究の視点と手だて

前頁の目指す子供像に近づくためには、単元の中に3つの要素が大切であると感じた。そこで、以下の視点と手だてを考え、仮説を検証することにした。

思いやりの心や公共心を高めるための3つの要素



【実践前の子供たち】

今年度は、本校の1年生と6年生の児童を研究対象として本研究を進めた。1年生の児童は入学して間もないうちからとても活動的で好奇心旺盛であった。縦割り活動で6年生のお兄さん、お姉さんと元気よく遊んでいる姿をよく見かけた。遊ぶことは大好きな1年生だが、自然に触れ合って遊ぶ機会は少なく、行動範囲が狭いことから、自分の近くの公園は知っていても校

資料3	
校区の公園を知っていましたか?	
幸公園	92%
元茶屋公園	16%
岩屋下第三公園	52%
クローバー公園	45%
東明公園	12%

区の中の他の公園がどうなっているかなど、資料3のように知らないまま生活している子が多くいる。6年生は外国籍の児童の割合、育成園の児童の割合が最も高く、様々な環境の子供たちと学習したり運動したりしている。そのため、外国籍の児童などに対して避けたり、変な目で見たりする児童は少ない。しかし、地域の外国人に対する子供たちのイメージは資料4のように「夜、うるさそうにしている」「うる

さいし、悪いことをやりそう」「見た目はこわそう」など、自分とは同じ立場の存在だと思っていないことが分かる。

資料4

校区に住んでいる外国人の人にどんなイメージをもっていますか

なんか岩西小学校にいる外国の友達はいいい人
たけど大人の人とかが夜うるさそうにしているイメ
ジがあると思ひああとどこかから書くとかそうい
うのをしているイメージも少しあります

(4) 単元構想図

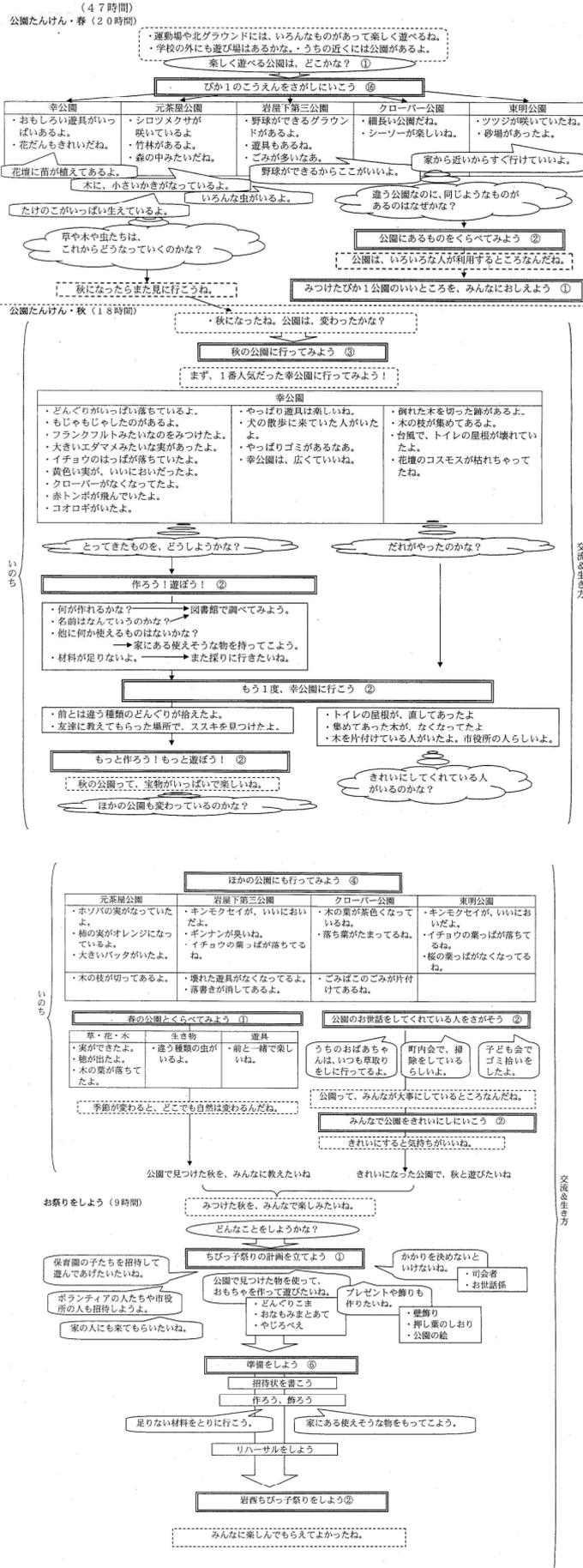


写真1 実ができていますよ



写真2 公園の枯れた木を集めてくれてるよ



写真3 セミ 見つけた

ここは今の国?昔の国? (話し合い) ①

●ジンバブエの住居、野営式住居の写真を比べて話し合う

ジンバブエ

- ・レンガで囲まれている
- ・屋根はわらでできている
- ・T シャツを着ているから、今の時代かな?
- ・今にしてはほろろすぎる

野営式住居

- ・すべてわらでできている
- ・入り口に戸がない
- ・どちらかわらを使っているから、同じ時代かな?

2000 年前の日本

まだ昔の日本のような暮らしをしている国があるんだな
もっとジンバブエのことが知りたい

矢澤先生にジンバブエの生活のことを聞いてみよう② (話② 感想交流①)

●矢澤先生から、ジンバブエの生活についての話を聞き、感想交流をする

ジンバブエの様子

- ・パンのような食べ物
- ・水がとても貴重
- ・あまりおいしくないさそう
- ・水をくんで使いたいといけないうから大変
- ・自分たちはなんて便利な生活をしているんだらう

矢澤先生の生活

- ・毎日火おこしをしていた
- ・学校の中に家があって、よみかみまで集まっていた
- ・なんでも自分でやるのは、大変そう
- ・火おこしは大変
- ・みんなが集まるのは楽しそう

外国の辛さ

- ・言葉が通じなくて、気持ち悪くなってこない
- ・言葉が通じないで辛い
- ・A 男たちも辛うって思っているのかな

外国に住んでみたいけど、言葉が通じないのは大変そう
電気もないし、火も水も自分でやるのは辛い

●若西に住んでいる外国人の人は、日本に来てどう思っているのかな?⑩ (字読の話し合い①、アンケート作成④、中間発表④、感想交流①)

校区在住の外国人

●予想の話し合う

大変だ、辛い、悲しい

- ・日本語が難しいから
- ・周りにいる人が何を言っているのかわからない
- ・食べられるものもあんまりないと思うから。

便利、うれしい、いい

- ・日本にはコンビニもあるし、お店もたくさんあるから。
- ・日本の人は優しくしてくれる人もいたと思うから。

社会『縄文時代にタイムスリップ』

●昔の人々の大変さがわかってきた気がする

●こんなに大変なのだから、みんな協力し合いながら生きていたのだと思う

●ジンバブエの生活だけでなく、外国で生活することについて、矢澤先生が感じたことも話していた

●子どもたちが地域に住んでいる外国人に目を向けられるようにする

●国工『世界の国旗を掲げよう』

●僕は自分の生まれた国の国旗にしよう、世界にいろいろな国があるんだね

●道徳『幸せってなんだっけ!』①~③

- ・周りにいる全てのひとと私とは友達なんだ
- ・世界の人々と仲よくなれたらいいな
- ・もっとたくさんの人と仲よくなれる方法を考えていこう

外国のことを知って、これから若西に住んでいる外国人と本当は仲よくなれるのかな?本時 (話し合い)

仲よくなれる

- ・外国の遊びを体験してみよう、おもしろいものがあつた
- ・みんなで遊んでいけば自然と仲よくなれる
- ・外国人の人も多かった

仲よくなれない

- ・言葉が通じないと仲よくなるのは難しい
- ・外国の人の中には、ルールを守らなかつた
- ・マナーがなかったりする人だつた
- ・話しかける勇気がない

●いろいろな問題はあるけど、勇気をもって、外国人と関わりをもっていくことが大切なんだね

●若西のみんなに外国のことを話そう④ (計画・実践③ 感想交流①)

●外国人と仲よくなる活動を描き、実践する

●若西のみんなに外国の遊びを話そう

●みんながもっと仲よくなるように、僕たちができることを話そう⑤ (話① 計画・実践④ 感想交流①)

●校区に集まる外国人、PTA 組長の若西さん、国際交流委員のギョウさん

●社会『世界の旗を掲げよう』

●人に親切にすると、自分も気持ちよくなる

●何か人のためになることをやってみよう

●日本人も外国人もお互いの協力し合って、みんなが気持ちよく、楽しく生活できるようにしたいね

●今度は友達の外国人の人のためにできることを考えよう⑥ (体験② 話② 発表① 計画・実践④ 感想交流①)

●生活場面・辛い生活体験 (水くみ、食卓)

●支那についての調べよう

●青年海外協力隊の方の話を聞こう

●自分たちでできること計画して、実行しよう

●若西だけでなく、世界に生きるみんなと支え合って生きていきたいね

本当はどう思っているのかな?聞きに行ってみよう

地域の外国人にインタビューし、報告会をする

大変だ、辛い、悲しい

- ・言葉が通じないこと
- ・文化がちがう
- ・日本人がつかめたい

文化がちがうってどうちがうんだらう
日本人がつかめたいって何をされたんだらう

●2回目のインタビュー後、話し合う

大変だ、辛い、悲しい

言葉: 日本語は難しい、わからない
日本人: 家族と離れていても平気
日本人に差別されたら、バカにされたらした
学校: 日本はきびしい
食べ物: おいしいものがある
野菜、魚、納豆

差別がなくなるようにしたい
日本人ももっと家族思いになつたほうがいい
日本人と外国人が仲よくなれるようにしたい

日本人と外国人が仲よくなつていけたらいいな

●国ごとに分かれて調べ学習をし、感想交流をする

ブラジル

- ・カーニバルという派手な祭りがある
- ・フェイジョアータという豆を使った料理がある

フィリピン

- ・貧しい人がとても多い
- ・お米が主食で、日本と似た料理がある

ペルー

- ・馬の骨をつかった楽器がある
- ・日本に出稼ぎに来ている人が多い

中国

- ・中国の料理は日本でもよく食べられるものが多い
- ・卓球やボウリングとかは日本でもやっている

日本

- ・日本の伝統的なスポーツに相撲がある
- ・日本人が差別するのは、外国人のマナーが悪いから

●調べる際には、本やインターネットだけでなく、聞き取り調査も交え、より生きた情報に触れるようにする

●外国についての知識だけでなく、そこで暮らしている人々の様子を写真や映像などから考えるように声をかけ、生活の様子についても目を向けることができるようにする

●日本語をうまくしゃべれない方も多いので、通訳になる児童とともに、聞き取り調査を行うようにし、その児童のすこぶりにふれたら、関わりを深めたりできるようにする

●中間報告会を行い、さらに深く知りたいこと、多くの人に聞く必要があることを整理し、2回目の聞き取り調査が充実したものになるようにする

●地域の外国人について感じたことを交流する場を設けることで、今までもっていた外国人に対するイメージが変わってきたことに気づくことができるようにする

●道徳『幸せってなんだっけ!』④~⑥

- ・みんなのことを考えて、分け合えるって幸せなことなんだね
- ・他の誰かのために与え続けることも幸せなんだ
- ・人はみんな幸せのために生きているんだね



写真4 調べた国のことを発表



写真5 茶道体験 (日本)



写真6 少林拳 (中国)

●若西の外国人が住んでいた国では、どんな生活をしていただろう⑪ (調べ⑧、発表②、感想交流①)

●外国籍児童の保護者中心

●日本と外国の違いはいろいろな所であるんだな。こんなに違うから、大変に思ったり、いいなと思ったりすることがあるんだね。

●調べる際には、本やインターネットだけでなく、聞き取り調査も交え、より生きた情報に触れるようにする

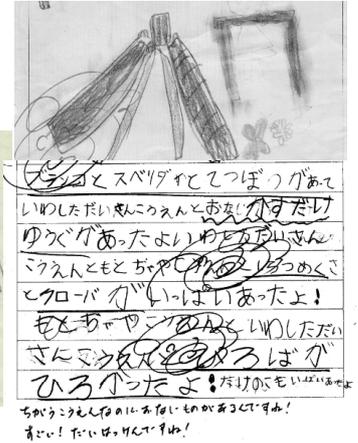
●外国についての知識だけでなく、そこで暮らしている人々の様子を写真や映像などから考えるように声をかけ、生活の様子についても目を向けることができるようにする

4 研究の内容（研究実践）

(1) 1年 生活科 『こうえんへいこう』

① 気付く段階 [手だて：いのち①, 生き方①]

子供たちに「楽しく遊べる公園はどこ？」と問い掛けると、「クローバー公園」「東明公園」など自分の家の近くの公園の名前を答える子供がほとんどであった。校区にはもっと楽しく遊べる公園があることを知らせたいと考えた。そこで、「みんなでぴか1の公園をさがしに出掛けよう」と、校区にある公園へ出掛けることにした。子供の考えを深めていくための支援として公園で見つけたものを資料5のようなワークシートにかかせるようにした。自分が思っていることも言葉で書くようにさせた。



資料5 見つけたもの



② かかわる段階 [手だて：生き方②]

個々の気付きを共有するため、それぞれの公園にあるものを出し合う授業を行った。その中で違う公園なのに同じようなものがあることに子供たちは気付き、「どうしてかな？」と疑問をもった。

③ 深める段階 [手だて：生き方②]

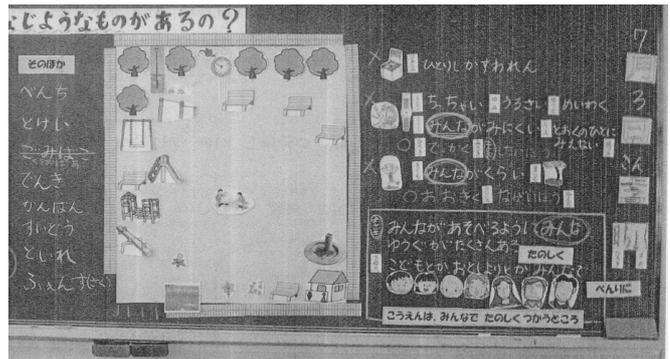
子供たちの考えを深めるため、「違う公園なのに同じようなものがある。ほんとうかな？」と問い掛けた。その問いに対して資料6のようなワークシートを使って確かめた。

資料6 同じようなものに気付く

同じようなもの	あった公園(○をつける)
ゆづり	(○) いわした だいらこうえん (○) もとやちこうえん (○) かねさこうえん (○) くらげこうえん (○) くらげこうえん
ももつぼみ	(○) いわした だいらこうえん (○) もとやちこうえん (○) かねさこうえん (○) くらげこうえん (○) くらげこうえん
ゴキウ	(○) いわした だいらこうえん (○) もとやちこうえん (○) かねさこうえん (○) くらげこうえん (○) くらげこうえん
すすめ	(○) いわした だいらこうえん (○) もとやちこうえん (○) かねさこうえん (○) くらげこうえん (○) くらげこうえん
とけい	(○) いわした だいらこうえん (○) もとやちこうえん (○) かねさこうえん (○) くらげこうえん (○) くらげこうえん
とくれ	(○) いわした だいらこうえん (○) もとやちこうえん (○) かねさこうえん (○) くらげこうえん (○) くらげこうえん

そうすると、同じようなものがあることに、ほとんどの子供が気付いた。そこで、「みんないろいろ言ってくれたけど、べつになくてもいいじゃん」と何も無い公園の絵を提示してみた。すると、「遊具はいります。楽しいから」「時計もいります。時間が見れんもん」「トイレもいります」「ベンチもいります。おじいさんやおばあさんがすわれるように」など公園にある公共物が必要であることを子供たちは次々と発表していった。(資料7)そして、さらに子供の考えを揺さぶるために、時計という発表に対し、

資料7 子供の発言を整理した板書

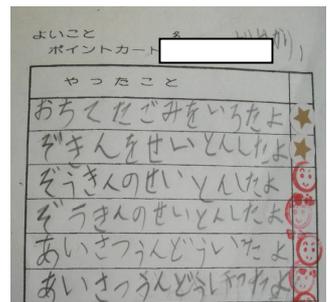


し、目覚まし時計の絵をはったり、電気という発表に対し、懐中電灯をはったりすると「みんなが見えない。時計は大きい時計でないといけない」など、だれのためにあるのかを考えはじめた。そこで、「みんなってだれ？」と聞くと、資料7のように「小さい子のために」とか「お年寄りのために」などと公園は、いろいろな人が利用することに改めて気付いた。

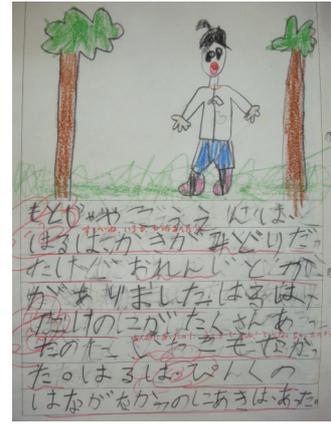
④ ひびく段階 [手だて：いのち①, 生き方①, ②]

「みつけたぴか1の公園のいいところをみんなに教えよう」という授業を行った。子供たちは、自分で遊んだ公園であるので、ワークシートを基に、自信をもって自分の「ぴか1の公園」を発表することができた。そして、運動場の遊具で遊ぶときには、順番を守って遊具を使用したり、ぞうきんの整頓を進んでしたりする子供の姿が見られるようになった。資料8の「よいことポイントカード」にあるように生活に生きてきたことが分かる。

資料8 ポイントカード



資料9 自然の変化に気付く



⑤ かかわる段階Ⅱ [手だて:いのち①, 生き方①]

秋には、春に行った公園に、時間を置いてもう1度出掛けることで、「たけのこがなくなってるよ」「クローバーは咲いてないけど、どんぐりがいっぱいあったよ」など、春の体験と比べて自然の変化を実感することができた。(資料9) たっぷり探検の時間をとることで、子供たちは持って行ったバッグがいっぱいになるまで木の実や葉っぱを拾い、公園のすみずみまでしっかり探検し、変化した自然のすばらしさ、いのちの不思議さを感じ取ることができた。(写真7)



写真7「こんなにたくさんとったよ」

⑥ 深める段階Ⅱ [手だて:いのち①, 交流②]

公園で採集した実や葉などを使っ

て、子供たちは、おもちゃや飾り物などを作った。材料が足りなくなると、授業後に公園へ採集に出掛ける子もみられるようになった。「日曜日にお父さんと行ったら、幸公園にまつぼっくりがいっぱいあったよ」といって見せに来たり、「どんぐりにもいろいろ種類があるんだよ」と言って本で調べて来たりする子もでてきて、

自然の物に対する関心の高まりがみられるようになった。

自由に作品作りを楽しむ時間を十分確保することで、採集してきた植物の特徴や不思議さに気付き、もっと欲しい、もっと作りたい、もっと遊びたいという思いが高まり、自然への愛着を増していくことができた。

公園探検を進めていくうちに、「台風で倒れた木を片付けたのはだれだろう?」「春の花とは違う花が植えてあるよ」と公園にかかわっている人にも目を向けるようになった。公園の世話をしてくれる人、公園を利用する人に話を聞くことにより、さらに公園に対する思いが膨らんできた。(写真8)



写真8 台風で折れた枝を片づけているおじさんにインタビュー

公園探検に満足した子供たちは、その楽しさをみんなに知らせ、一緒に楽しむ活動をしようと考えた。毎年招待している岩西保育園児の他に家の人や、インタビューや探検に協力してくれた人を招待することで、地域の人との交流を深めたいと考えた。

しかし、今年は、新型インフルエンザの影響で、行事が中止となってしまったため、学級、学年のみで開催した。(写真9)



写真9 つかみ取りの様子

子供たちは、公園で秋を十分満喫したためか、どんぐりやまつぼっくりなどを使い、お店やゲームなどを工夫して作り、自分たちも楽しんだ。

十分活動し、満足した子供たちは次の活動への意欲をもち、動き出すようになっていた。

⑦ ひびく段階Ⅱ [手だて:いのち①, ②]

子供たちは、公園探検をするたびに自然物や公共物についての発見をする一方、「花火が落ちていたよ」「トイレに落書きがしてあるよ」など、心無い人たちが残したのものにも気付くことが多かった。そこで、生活科の学習の中での気付きをさらに高めるために、道徳「かわそうじ」の学



写真10 校外学習でのゴミ拾い

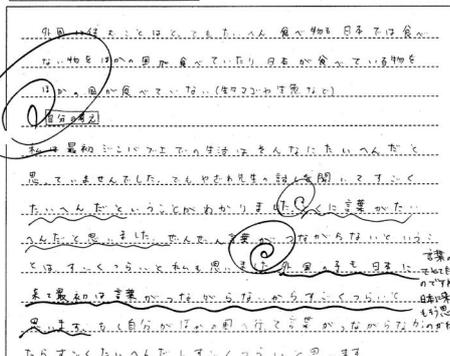
習を行った。子供たちは、教材に出てくる川を自分たちが探検している公園と重ね合わせて考え、きれいにしたいという気持ちを強くしていくことができた。どんぐり拾いをした後のごみ拾いでは、どの子も真剣にゴミを探していた。(写真 10)

(2) 6年 総合的な学習 『共に生きよう みんなの世界』

①気付く段階 [手だて：いのち①, 生き方①, ②]

資料 10 外国で生活する大変さに気付く

外国に住むことについて



子供たちの地域に暮らす外国人への興味を高めるために、外国で生活した経験のある6年1組の矢澤先生から外国で生活することについて話をしてもらった。この話の後の子供たちの感想は資料 10 のように異なる文化の中で生活することは大変であるという思いをもった。そして、自分たちの周りにはいる外国籍の子供たちも同じような思いをもっているのだろうか、関心をもつことができた。そこで、「岩西に住んでいる外国の人は、日本に来てどう思っているのかな」という話し合いの授業を行った。

「日本語が難しいから大変だ」や「食べられるものがあまりないから辛い」という意見と「日本はコンビニにもあるし、お店もたくさんあるから便利」という意見が出された。この話し合いから、「本当はどう思っているのかな」という課題が生まれ、聞きに行くことになった。

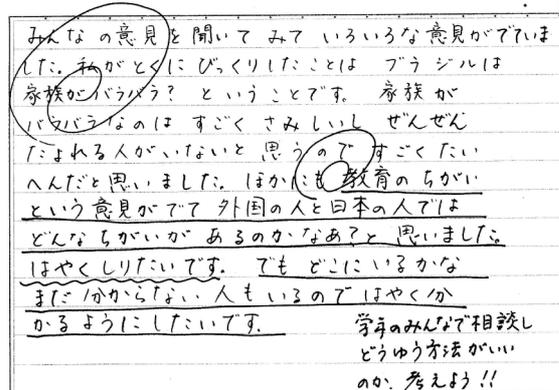
資料 11 街頭アンケートから新たな課題

②かかわる段階 [手だて：交流①, 生き方①, ②]



写真 11 どう思っているのかな

多くの外国人の考えを集められるように街頭アンケートを行った。アンケートについては、日本語では答えられないので、あらかじめ子供たちの知りたいことを通訳の先生に訳していただいた。また、通訳できる子供と共に聞き取り調査を行うようにし、その子供のすごさに触れたり、かかわりを深めたりできるようにした。(写真 11) 見ず知らずの外国人にアンケートをするという事で、子供たちの中にはとまどいを感じた子が多くいた。



しかし、インタビューをしたことの報告会では、「日本は安全」「日本の教育がいい」「日本人が冷たい」など、様々な報告が挙げられ、意外な結果に驚き、「もっと詳しく知りたい、もっとたくさんの人に聞きたい」と思うようになり、2度目のインタビューへ出かけた。(資料 11) 2度目のインタビュー後の話し合いから、「日本人ももっと家族思いになったほうがいい」「日本人と外国人が仲よくなれるようにしたい」「ブラジルは治安が悪いのかな」「外国の学校はどんな学校なのかな」など、『知らないことばかりだったから、もっと外国のことを知ろう』『日本人と外国人が仲よくなっていけたらいいな』と考えるようになった。

③深める段階 [手だて：いのち, ①, ②, 交流①, 生き方①, ②]

外国の文化についての調べ学習を行う際にも、聞き取り調査を取り入れた。本やインターネットで得た知識だけではなく、生の声を聞けるようにアンケート用紙を持って出掛けるようにした。聞き取り調査を進めていく中で、実際に外国の文化を体験してみたいという意見が多く出された。そこで、

外国籍児童の保護者を外国文化の講師として招き、体験活動の時間をとった。

ブラジル・・・フェイジョアード(豆料理)を作って食べてみる。

カポエイラ体験

フィリピン・・・バンブーダンス体験

フィリピン料理(ハロハロ)を作って食べてみる。

ペルー・・・ペルー楽器演奏体験

中国・・・杏仁豆腐を作って食べてみる。

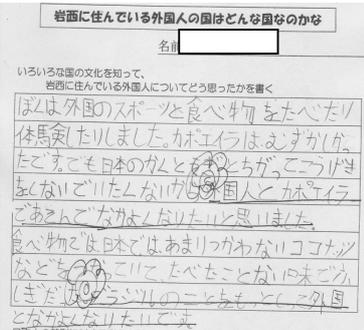
日本・・・茶道体験



写真 12 カポエイラ体験

資料 12 外国人の大変さに気付く

体験活動の後、外国の文化につ



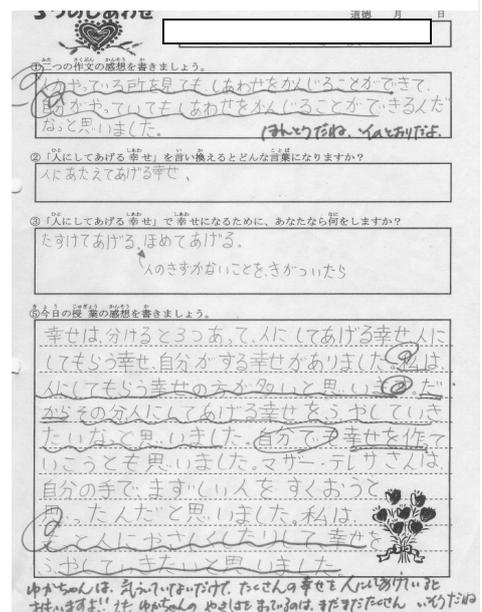
いて、調べたことや体験したこと、感じたことを伝える場として、ポスターセッションを行った。その時の子供たちの感想は、日本と外国の違いは一言で言えないぐらい、いろいろなところであるということであった。そして、こんなに違うからこそ、大変に思ったり、いいなと思ったりすることを実感していった。

『道徳を中心とした他教科との関連』

総合的な学習の時間で感じた思いをさらに高め、共に生きていこうと

する気持ち、思いやりの気持ちを高めるために、道徳「幸せってなんだっけ」を総合主題として8時間設定し、効果的に関連させた。多くの子は、人にしてもらった幸せは感じているが、分かり合える幸せや自分が役立つ幸せには気付いていない。総合的な学習の時間における活動と道徳の時間の学習をかかわらせながら扱っていくことで、お互いのよさや違いを認め合い、共に生きていくことが幸せにつながるのだという心情を高めていけるはずである。そこで、「3つの幸せ」の道徳の授業を取り入れた。子供たちは、たくさんの幸せがあることや幸せの価値観は人それぞれ違うのだということに気付

資料 13 3つの幸せ



資料 14 授業記録「これからみんなは岩西に住んでいる外国人と本当に仲良くなれるかな？」

- C 1 : 仲よくなれる。文化の違いとか見た目で差別がある。文化の違いは当たり前。違いを認め合わないとは差別は続く。
- C 2 : 今のままでは仲よくできない。一人が思いやる気持ちをもっていてもできない。大人になったら岩西校区は外国人が気持ちよくすごせるすばらしい校区になってほしい。
＜中略＞
- C 3 : 悪口とか言う人をなくすためには、外国人への自分たちの思いを変えていくべき。
＜中略＞
- C 4 : 大人はこわいから話しかけられない。
- C 5 : 見た目もこわくて行動があぶない。
- C 2 : こわいって言ったけど、アンケートのとき、こわそうな人がいたけど、とっても優しくだったので、積極的にチャレンジしていくことが大切。
- C 3 : アンケートのとき優しくなった。チャレンジ精神で優しく接していけばいい。
- C 6 : まず1歩が大事。
- C 1 : 仲よくしていくべき。こわい人だけ差別している。話していけば仲よくなれる。
- C 7 : ベルリンの壁のようにこわしていくべき。マテウス君みたいに声をかけていくべき。

いた。資料 13 は、授業後の子供の感想である。その気付いた幸せの価値観を総合的な学習の活動の中で確か

に実感している。また、外国についての調べ学習の段階では幸せ感について考える授業をし、友達と意見交換をする中で、お金や物が豊かであることが幸せではなく、家族がいたり、毎日を一生懸命生きたりすることも幸せであることに気付くことができた。

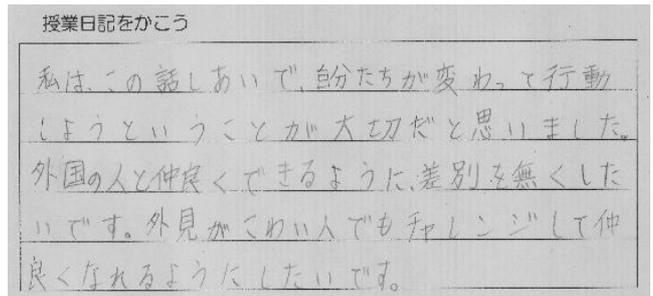
④ひびく段階 [手だて:いのち②, 生き方①, ②]

これまでの活動を通して、日本人と外国人の間には、考え方や文化など、多くの違いがあることを実感し、それらを踏まえた上で、もっと仲よくしていきたいという思いをもった。また、日本人の外国人に対しての差別な

ど、仲よくしていく上で様々な問題があることにも気付き始めていた。そこで、「これから岩西に住んでいる外国人と本当に仲よくなれるのかな」という課題で話し合いの授業を行った。資料14は、そのときの授業記録である。C1のように「仲よくなれる」という意見がほとんどであったが、C4の「大人の外国人には話しかけられない」という発言から、子供たちは、本音で語るようになっていった。C2のように「積極的にチャレンジしていくことが大切」という発言があった。その発言から、仲よくなっていくには、話し掛けたり、挨拶するなど、まずかかわっていくことが大切であることの共通理解が生まれた。そして、授業日記には、資料15のように「自分たちがまず変わって、行動しようということが大切だと思った」「自分自身が変わらなきゃいけない」と書かれていた。

⑤ ひびく段階Ⅱ〔手だて：交流①，生き方①〕 資料15 授業日記

この話し合いの後、もっと校区の人が仲良くなれるように、自分たちにできることを考えていくことにした。地域ボランティアコーディネーターの鈴木豊さんから、岩屋住宅（団地）の落書き消しを外国人たちがやってくれている話を聞いたり、国際交流協会ギダさんから人権の話を聞いたり、青年海外協力隊の深谷さんから海外で暮らすことについての話を聞いたりして、自分たちにできる活動を考えることにした。



子供たちが考えたことは、外国の言葉であいさつをしよう，今まで勉強したことを伝えよう，外国の遊びを全校のみんなで遊ぼう，外国の人にカードを送ろう，という4つのことであった。自分たちの思いを届けるにはどうしたらよいのか、各グループで話し合いを繰り返し、実践することができた。外国の言葉であいさつしようと考えたグループでは、ポスターやびらを作って、他学年の子や地域の方に配って伝えようと考えた。また、校舎内をあいさつしながら歩いて回り、直接他学年の子に教えにいった。さらに、毎月行われているあいさつ運動とも関連させ、月曜日は英語で、火曜日はポルトガル語で、と外国の言葉であいさつ運動を行った。外国の人と気軽にあいさつをして仲良くなってほしいという思いから、劇の作成にも取り組み、こういったことから仲良くなってほしいという思いを伝えることができた。このようにして、自分たちの思いを伝えようと様々な方法を考えて実践することができた。これらの活動に取り組み、今まで地域の方から学んだことを今度は自分たちの思いにして地域にかえすことができたのである。



写真13 外国の遊びを低学年といっしょにやってみる

【考察】

本単元を通して、何度も何度も外国人の方とかかわることで、子供たちは様々なことを考え、出てきた課題を話し合ったり、また、体験したりすることで、考えを深めていった。総合的な学習の時間と道徳をタイムリーに結び付けることで心情を高めるために効果を上げることができた。学級の外国籍の友達とは仲よく生活できるのに、地域に目を向けると、まだまだ壁があり、壁をなくすには、自分からかかわっていかねばならないことを実感できたと思う。思いやりの心が育ったかどうかは簡単には見取ることはできないが、ワークシートの言葉から少しずつではあるが、確実に子供たちの気持ちが育っていると感じる。

いのち、交流、生き方の3つの要素がスパイラル的にかかわり、子供の思考を高めていくことも検証された。

4 研究のまとめと今後の課題

(1) 自然・生命の尊さに気付いたり、人の愛情を実感したりする時間を多くとることによる変容

地域の自然や人々と十分ふれあうことで、子供たちは、確実に地域への愛着を増していったといえる。学習の前には、「ただ近くにある公園」程度だったものが、何度も出掛け、遊び、採集し、そこを利用している人とかかわる中で、「ぼくたちの岩屋下第3公園」「わたしたちの東明公園」へと変わって行った。「自分たちの公園だからきれいにしたい」という思いが芽生え、「大切にしたい」という気持ちをもつことができた。体験活動の時間をしっかりとったことは、生命の尊さに気づき、実感するためには有効であったと思われる。

また、6年生では、他文化にふれる体験をすることにより、文化や慣習の違いを実感をもって理解することができた。また、道徳や社会を効果的に組み込んだことで子供の考えをより深めていくことができた。

(2) 地域の人々とかかわることによる変容

地域の人々と何度もかかわることにより、その場所、その人に愛着をもっていくことが資料16より分かる。また、地域の人々の思いや考えに触れる活動を取り入れることによって、地域にある問題を自分のこととしてとらえ、意欲的に追究活動に取り組むことができるようになったと考える。そして、それにかかわる人々との交流を行うことにより、意欲を持続させ自発的な学びを作り出すことができたのである。さらに、同じ地域の一員として自分はどうあるべきなのか考えることができたり、理想の地域の姿を追い求めて活動したりできるようになるであろう。

(3) 伝え合う活動をするることによる変容

子供たちの意識から出てきた問題を話し合うことにより、次の課題を見付けることやさらに自分の生き方について考えることができた。

実践を通して、一人一人の見方や考え方を大切にするとともに、個の考えのずれをとらえ、話し合いの場を設けていくことは、子供たちの見方や考え方を広げ、深めていくこととなった。それだけでなく、子供たちが次のステップで生き生きと活動できる原動力にもなりうることが分かった。

子供たちが地域に出て、地域の人・もの・自然に学ぶ生活科や総合的な学習をしていくことで、公共心や思いやりの心が徐々に育っていくことが明らかになった。

(4) 今後の課題

研究は本年度を初年度として2年間行う。実践後の子供がどれだけ変わっているのか、今後も検証をきちんとしていきたい。また、単元後には、親子ふれあい活動や校区の公園をめぐるウォークラリーなど、全校の取り組みも組み入れ、より地域との連携を図っていきたい。

3年生の『地震からみんなをまもれ』、4年生の『福祉の町 岩西へ』、5年生の『働くってどういうこと?』の単元でも地域の人・もの・自然と大いに触れ合うことで学習を深めていく。校区に愛着をもてる子供が育っていくよう研究を進めていきたい。

資料16 地域の人とのかかわりによる変容

これからみんなは、岩西に住んでいる外国人と
本当に仲よくなれるのかな

名前

この総合の授業がなければ、今でも差別や悪口を言っていると思います。でもみんなの国(5か国)を知り、大変な事、不安だ、たはる事が分かりました。なので、外国人と仲良くなれると思います。自分がその場の立場と考えると、こてもいやになる。毎日がつらいです。みんなにみんなとかが、ておが、いの国が分かるし、その方が...と思います。みんなそれぞれがあるから分かりあえる。自分の国の文化や習いで遊んだりしたいです。授業日記をかき、

心のノートを活用した「規範意識を高める考え方」の構成

武豊町立武豊中学校 岩橋 雅高

1 はじめに

わたしは、平成 17 年度から 3 年間、ミャンマー一連邦にある在外教育施設ヤンゴン日本人学校に勤務していた。そこで、ミャンマーの人たちに日本語を教えるボランティアをしていた折、実に規範意識が高いことに気が付いた。もちろん、国情の違いにより、衛生や環境問題に関わる規範意識は低く、日本人の考える規範意識との間に差があることは否めないが、集団や社会に関する規範意識は、とても高く、その行動に何度も感心させられた。



写真 1 日本語を学ぶ生徒たち

日本語の授業で席がいっぱいになっても、しっかり奥に詰めて座れる場所を他の人のためにつくってあげる学生たち。満員のバスや電車では、外にはみ出るような危険な乗り方をする中、必ずお年寄り、幼い子、女性を安全な内側に座らせて、率先して外に立つ男性たち。お年寄りが通行量の多い道路を横断するときは、必ずそれを助けてあげる周りの人たち。こんな感心する光景をたくさん見てきた。

ミャンマーでは、普段の治安は良く、犯罪も日本に比べて非常に少ない。外務省「海外安全ホームページ安全の手引き」によると、「重要犯罪だけ見ても、ミャンマーは日本の 20 分の 1 程度（2006 年 10 月 1 日）」とある。日本ではほぼ毎日のように報道される重要犯罪が、ミャンマーでは 20 日に 1 回程度と考えると、その犯罪の少なさが分かる。

その要因となっているものは、何であろうか。以下、ミャンマーでの生活の中で感じ取った、その集団や社会に関する高い規範意識を生み出す要因と思われるものを 4 つ挙げる。

- ・小乗仏教の教えを守る敬虔な信者が多い

国民の 90% が仏教徒であり、その理念を守らなければいけないという考えが広く浸透している。これを守ることがステータスであり、自分の誇りだと考える人が多い。このことから、成長過程で教えられる考え方の基本に「仏教の教え」があり、周りにその見本となる大人がいるため、その教えをしっかりと守る考えが身に付くと考えられる。

この教えを守り、功德を積むという教えに基づく考え方が周りの人のことを考えることにつながり、集団や社会の規範意識を高めている一因になっているのではないだろうか。

- ・僧、師、親を尊敬する教え

自分を生かし、高めてくれる存在である「僧・師・親」には、礼儀を尽くし、敬うべき対象として

幼いころから教えられる。その「僧・師・親」が、主に子供たちに教えることは、「困っている人を助ける」「年少者をいたわる」「年長者を敬う」「子供をかわいがる」「いつも微笑んでいるとよいことが訪れる」「大声を出すことは心を乱すことで、みっともないこと」「毎日お祈りをする」など、社会生活にかかわる内容であり、実際に、家庭だけでなく地域で多くの大人がそれを子供たちに伝えている。

敬うべき対象者からの教えを幼いころから聞き、実践することで周囲に認められ、そうすることの良さを実感していく過程が集団や社会の規範意識の高さをつくり出しているように感じられる。

・教えに従うことで得られる「自己肯定感」が強い

ミャンマーの人たちに話を聞くと、仏教や「僧・師・親」に従っていれば、それは正しいことであるから、その報いとして自己実現できると確信している人が多いことに気付く。実際には、それだけでは夢は実現できないと思えることでも、真剣に信じて実践している。日本語教室のある生徒は、「日本へ行けるように、毎朝4時に起きて仏様にお祈りしています」と真剣な表情で話してくれた。貧富の格差が激しい国だが、貧しくても、裕福でも、教えを守っているという自信から確固たる「自己肯定感」をもち合わせていることを感じる。

・集団への所属意識が強い

大家族で狭い家に暮らす家族がほとんどで、子供たちは、いつも周りには誰かがいる環境の中で生活している。家族全員でお寺にお祈りに行ったり、朝晩の食事を一緒にしたりすることは当たり前である。地域の人たちは、全員顔見知りで、連帯感も強い。市場でも、同じ場所で商売をしている仲間という意識が強いようで、個人の利益を追求するのではなく、市場全体で協力して商売をし、客を助けることを大切にしている。



写真2 市場の様子

このように、人々は大勢の人と一緒に協力しながら暮らしているので、その人との関わりの中から、ルールを守ることの良さや協力することの意義を幼いころから学んでいるように思われる。

これらのことから学校での教育活動の中で応用できるものを考え、実践すれば、規範意識の向上につながるのではないだろうかと考え、日々の実践に取り組んでいる。

2 研究の目的

本研究は、規範意識を高めるために学級でできる活動を実践研究することを目的とする。前述の「ミャンマーにおける集団や社会の規範意識が高い要因」と思われる「自己肯定感・集団への所属意識」をより確かなものにするすることで、規範意識の向上を目指す。

3 研究の方法

本研究は、規範意識を高めるために大切な『自己肯定感』『集団への所属意識』の向上のために、心のノートを活用した道徳の授業や学級活動を実践する。日頃の様子、日記、アンケートなどから、その規範意識の変化を検証していく。

(1) 学級の実態把握と実践の方向性

「自己肯定感」「集団への所属意識」と規範意識とのかかわりを探るアンケートを行い、その結果を基にして、何に焦点を絞って道徳の授業や特別活動を実践すれば、「自己肯定感」「集団への所属意識」が高められるかをとらえる。

(2) 心のノートの活用

(1)の結果を基にして、どのように「心のノート」を活用していくか考え、その実践をする。「心のノート」は、その学級集団の状態に合わせて教育活動中の様々な場面で活用できるだけでなく、その目的に合わせて家庭でも活用できる資料である。また、3年間を通して活用できる「心のノート」は、自分の変化を見つめるのに適している。

(3) 『自己肯定感』『集団への所属意識』向上のための学級経営

日々の学級活動の中に、「自己肯定感」「集団への所属意識」の向上を目的として日記指導を中心とした活動を取り入れる。

4 研究の内容

(1) 学級の実態把握「『自己肯定感・集団への所属意識』と規範意識の関係を探るアンケート」

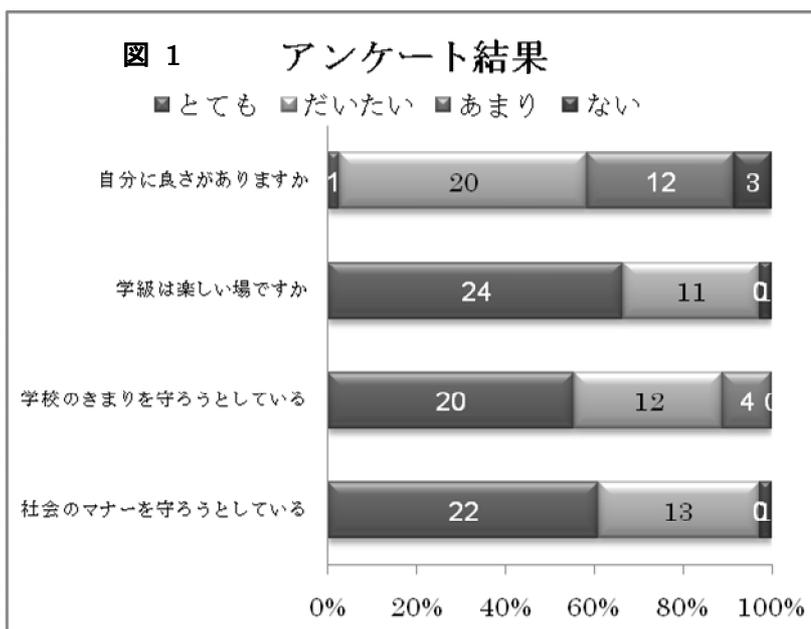
3年生生徒36人を対象に以下のようなアンケートを行った。

- ① あなたには、「良さ」がありますか。(選択肢)とても だいたい あまり ない
・その良さは何ですか。(記述)
- ② 学級は、楽しい場ですか。(選択肢)とても だいたい あまり ない
・その理由は何ですか。(記述)
- ③ 学校のきまりを守るよう努力していますか。(選択肢)とても だいたい あまり ない
・その理由は何ですか。(記述)
- ④ 社会のマナー(交通ルール・割り込みをしないなど)を守るように努力していますか。
(選択肢)とても だいたい あまり ない
・その理由は何ですか。(記述)

このアンケートの結果は、**図1**のようになった。

自己肯定感についてみる①の質問については、「とても」と答えた極めて自己肯定感が高い生徒が1人であった。また、「あまり」「ない」と答えた自己肯定感の低い生徒が合計で15人おり、全体の41.7%の高い割合を示していた。全体的に見て、しっかりした自己肯定感をもった生徒があまりいないようである。

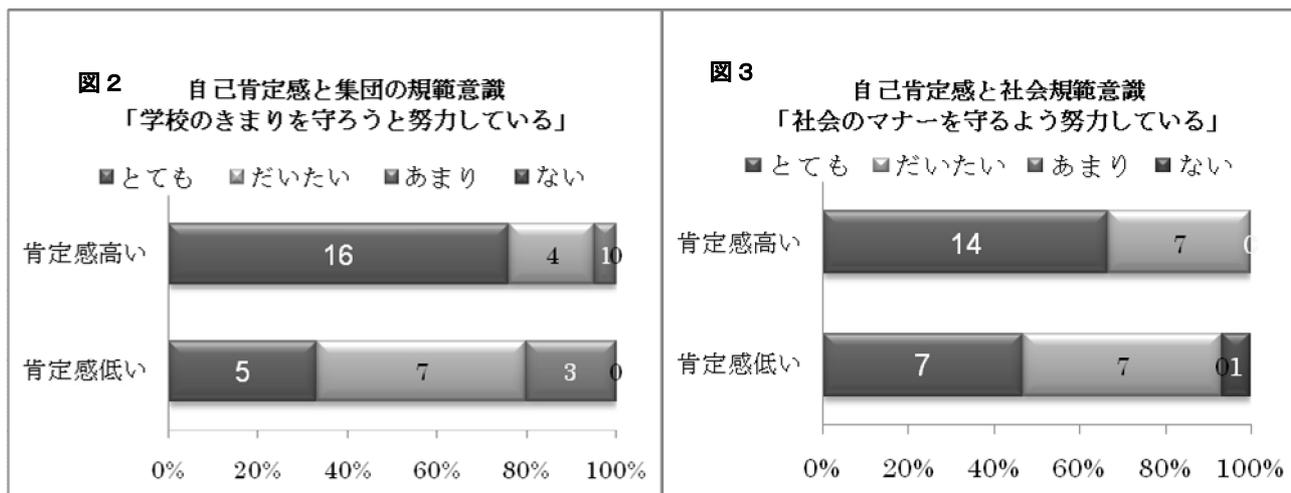
それに比べ、集団への所属意識についてみる②の質問については、学級を楽しい場と考える生徒は、「とても」「だいたい」合わ



せて 35 人おり、全体の 97.2% という高い割合を示していた。

「学校のきまりを守ろうとしている」生徒の割合と「社会のマナーを守ろうとしている」生徒の割合は、ほぼ同じと考えられるが、学校のきまりを守ろうとしない人数の方が多く、学校という場での規範意識の方がやや低いように思われる。

これを「自己肯定感」の高さと「学校のきまりを守ろうとする意識」や「社会のマナーを守ろうとする意識」の高さがどのような関係にあるか検証するために、「あなたには、良さがありますか」の回答別に、「学校のきまりを守ろうと努力している」と「社会のマナーを守ろうとしている」についてどう答えたかをグラフにしてみると以下の図 2、図 3 のような結果になった。



この結果から考えると、次のようなことがいえる。

- ・自分に良さがあると考えている生徒ほど、学校のきまりを守ろうとしている。
 - ・自分に良さがあると考えている生徒ほど、社会のマナーを守るように努力している。
- つまり、自己肯定感が強い生徒ほど、規範意識も高くなると考えられる。

次に「集団への所属意識」の高さと「学校のきまりを守ろうとする意識」や「社会のマナーを守ろうとする意識」の高さにどのようなかわりがあるか確かむために、「クラスは、楽しい場ですか」の回答別に「学校のきまりを守ろうと努力している」と「社会のマナーを守ろうとしている」についてどう答えたかをみると、学級を「とても楽しい場」あるいは「だいたい楽しい場」と考えている生徒 35 人は、全員守ろうとする意識が高かった。

記述式で回答した「守ろうと努力している理由」には、以下のようなものがあった。

- ① 自己の向上のため、あるいは社会集団の一人として向上するためと考えられるもの(17人)
 - ・今は、社会に出て恥ずかしくないように学ぶ時だから。
 - ・きまりを守れば、みんなが嫌な思いをしないで楽しく過ごせるから。
 - ・2年生の時だめだった自分を改善させ、自分自身を高めるため。など
- ② 守るのが当たり前のことととらえているもの(11人)
 - ・守らなければいけないものだから。
 - ・学校のきまりを守って悪いことは何もないと思うから。
 - ・普通に守っている。
- ③ 自己の利害関係からのもの(4人)
 - ・3年にとって大事な時で、高校に行くため。

- ・後々、自分に響いてくるから。
- ・叱られるから。

守ろうとする理由についても、向上心をもち、自律した考えを基にしたものであれば、将来も確かな規範意識につながると思われる。

また、「学校がとても楽しい」と答えたなかで「学校のきまりをあまり守るように努力していない」と答えた生徒3人の理由は、それぞれ「自分に負けているから」「めんどくさい」「してないからしてないでしょ」であった。この3人については、特に注意して今後の規範意識の変容を追っていきたい。

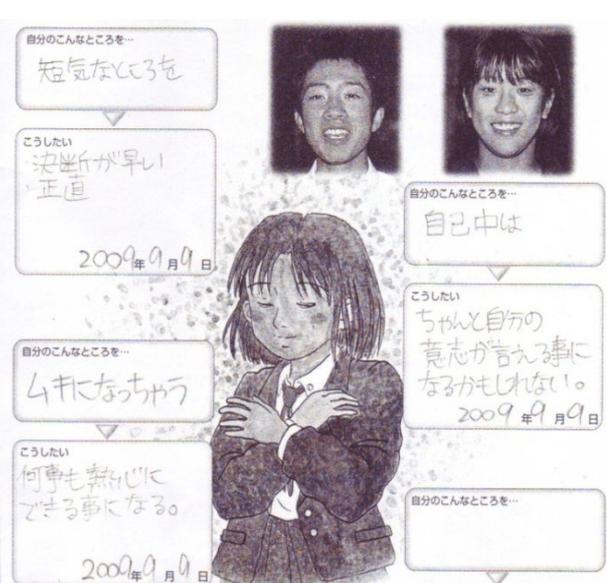
(2) 「心のノート」活用

ア 実践1

自己肯定感を高めるために、自己否定をする部分を自己肯定できる部分に変える考え方(リフレーミング)を伝える道徳の実践をした。

リフレーミングとは、ある枠組みで捉えられている物事の枠組みを外して、違う枠組みで見ることを指す。同じ物事でも、人によって見方や感じ方が異なり、ある角度で見たら長所になり、また短所にもなる。

この指導過程は、次のようである。

学 習 過 程	生 徒 の 反 応
<ol style="list-style-type: none"> 自分の「らしさ」について考える。 <ul style="list-style-type: none"> ワークシートに自分が考える「らしさ」を考えて記入する。 ワークシートを集め、名前を伏せて読まれた「らしさ」をだれのものか考える。 マイナスイメージの「らしさ」は、自分が思っているより他人は分からないことを確認する。 心のノート P. 32 を見ながら、嫌だと思っている部分もよさに変えられることを伝える。 変えたいところを考えて、心のノート P. 33 に「自分のこんなところを」に書く。 「自分のこんなところを」を発表し、どのようにリフレーミングできるか全員で考え、意見を発表する。 自分で「自分のこんなところを」について考え、「こうしたい」を書く。 授業の感想を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「几帳面」「良く考えるとふざけたことをしていることが多い」「むきになっちゃう」「自己中？」 ・自分が書いたものが読まれても、結局当てられなかったことを不思議がっていた。 ・心のノート P. 33 

生徒からは、「あきらめが早い」ところを「すぐに気持ちを切り替える」というよいところにした
いという意見や「むきになってしまう」ところを「何事も熱心に取り組める」というよいところにし
たいというような意見が出された。

これにより自分の中の否定的な部分を減らすことから自己肯定感を高めるきっかけになったので
はないだろうか。授業後の感想には、以下のようなものがあった。

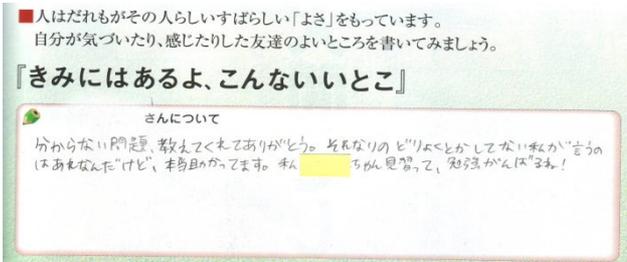
4 'よしこは変えられる。感想

僕も「〜らしいところ」とかよくあります。それは自分にとって嬉しい事も悪いことであ
ります。やっぱり。短所を無くそうと思えばやっぱり難しいです。その短所が何
か良いことに使えないか考えてみるとけっこう使えるものです。僕もバカな発言を
してはいけないと思うけど。それで周囲が笑ってクラスが明るくなるのは僕も
うれしいです。

今後、この考え方で自己肯定感を高められるように、時間をおいて「心のノート」のこのページを
見る機会を設けていきたい。

イ 実践2

自己肯定感を高め、かつ学級への所属意識を高めるために「心のノート」とワークシートを使った実
践を行った。その指導過程は、以下のようなものである。

学 習 過 程	生 徒 の 反 応
1 友達にしてもらって嬉しかったことを発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ・初めは恥ずかしがって数人しか意見が出なかったが、次第に小学校時代のころまで遡り、意見が出た。
2 心のノート P.49 に友達の良さを記入し、相手に読んでもらう。 <ul style="list-style-type: none"> ・自由に相手を考えて、記入する。 ・クラスにその相手がいる場合読んでもらう。だれにも書いてもらえないこともあるので、時間は短めにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・仲のよい子1人か2人を選び楽しそうに書いていた。それを読んだ生徒はとても嬉しそうだった。 
3 教師の「友人に良さを認めてもらったことがやる気になって努力できた体験談」を話す。	<ul style="list-style-type: none"> ・短い話だが真剣に聞いていた。
4 全員で全員のよいところを伝え合えたら素晴らしいことを伝え、「良いところ発見シート」に取り組む。 <ul style="list-style-type: none"> ・シートに自分の名前を書く。 ・席の次の人(次に書くことになる人)にシートを渡す。 ・回ってきたシートの名前を見て、そのクラスメイトの良さを1分で記入する。 ・教師の指示で一斉に次に回す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・戸惑った様子だったが歓声も上がった。 ・初めは時間がかかっているようだったが慣れてくると集中して取り組めた。 ・慣れてくると30秒で枠いっぱいを書く生徒もいた。

5 全員に書いてもらった自分の良さを読む。	・うれしそうな顔をして集中してしばらく読んだ後、近くの生徒と「こんなことが書いてあった」「これお前が書いただろ」などいろいろ言葉を交わしていた。
6 教師の話聞く。	・良いところを全員が見ていてくれるという内容の話をする。

実際に行ってみると、集中力を切らすことなく、クラスメイトの良さを書くことができた。人の良さを探すということは、それだけで自分自身にも良い影響があるようである。ほとんどの子が集中して良い表情で書いていたことが印象的であった。

3年5組 1学期 良いところ発見シート	名前
落ちつきがある。マイペース。意外と努力家。読書好き。	
字がきれい	
字がす、こいきれい。おちついてる	
7-ル。字がキレてるのですごい。	
いつでも静かで、何でも知ってそうなところ。	
字がきれいで、本もよむのが大好きな人。	
けじめがついている人!!! 字がキレイなのを見た	
いつも冷静で、でも友達とばかり仲が良く、体がすごい。部活もバカバカに元気で頑張る	
常に冷静で部活めっちゃ熱心。字も上手い。優しい。	
字がすこくうまい。いつでも冷静な感じ。	
字がうまい、最近本読んでおかげで、よくしゃべりたくて楽しい。シュート外よく入る	
バスケットが上手い。字がきれい。マイペース。やさしい。	
バスケのボールテクニックがうまい。冷静に練習をみている。	

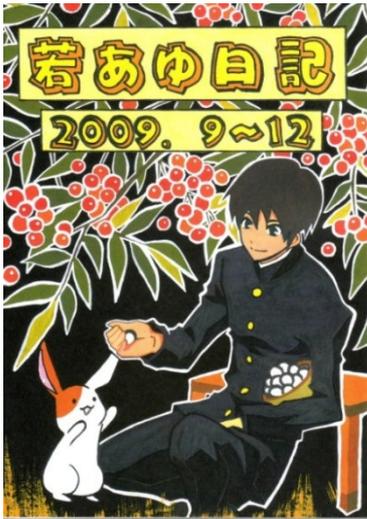
この日の日記には、以下のような文章が書かれていた。

「今日の6時間目に、『良いところ発見シート』を書きました。はじめは書けないかとも思いましたが、意外と良いところがどんどん出てきて、時間が足りないと思うようになりました。自分のシートが返ってきました。ピアノと勉強のことが多くて、みんなに認められているんだなとうれしくなりました。それだけじゃなく、意外なことも書いてあって、今の私は人にそういうふうに見られているんだと新しい自分の発見にもなりました。よいところ発見シートをもらった後、なんだかクラスの雰囲気が自然とよくなった気がしました。2学期も、3学期もあるのでどんどんクラスのみんなのよいところを見つけていきたいです」

この日の日記にクラスの半分以上の生徒が「良いところ発見シート」について書いてきており、その内容から自己肯定感が強くなったことを感じた。また、この活動後、欠席した給食当番の代わりに進んでしてあげた生徒に気付いて日記に書いてきたり、日直の忘れられていた仕事をしてあげていた生徒のことを教師に報告したりすることが多くなった。意識が人の良いところに向けられており、それを認めてくれる仲間がいる場所として、学級への所属意識も高まったのではないだろうか。

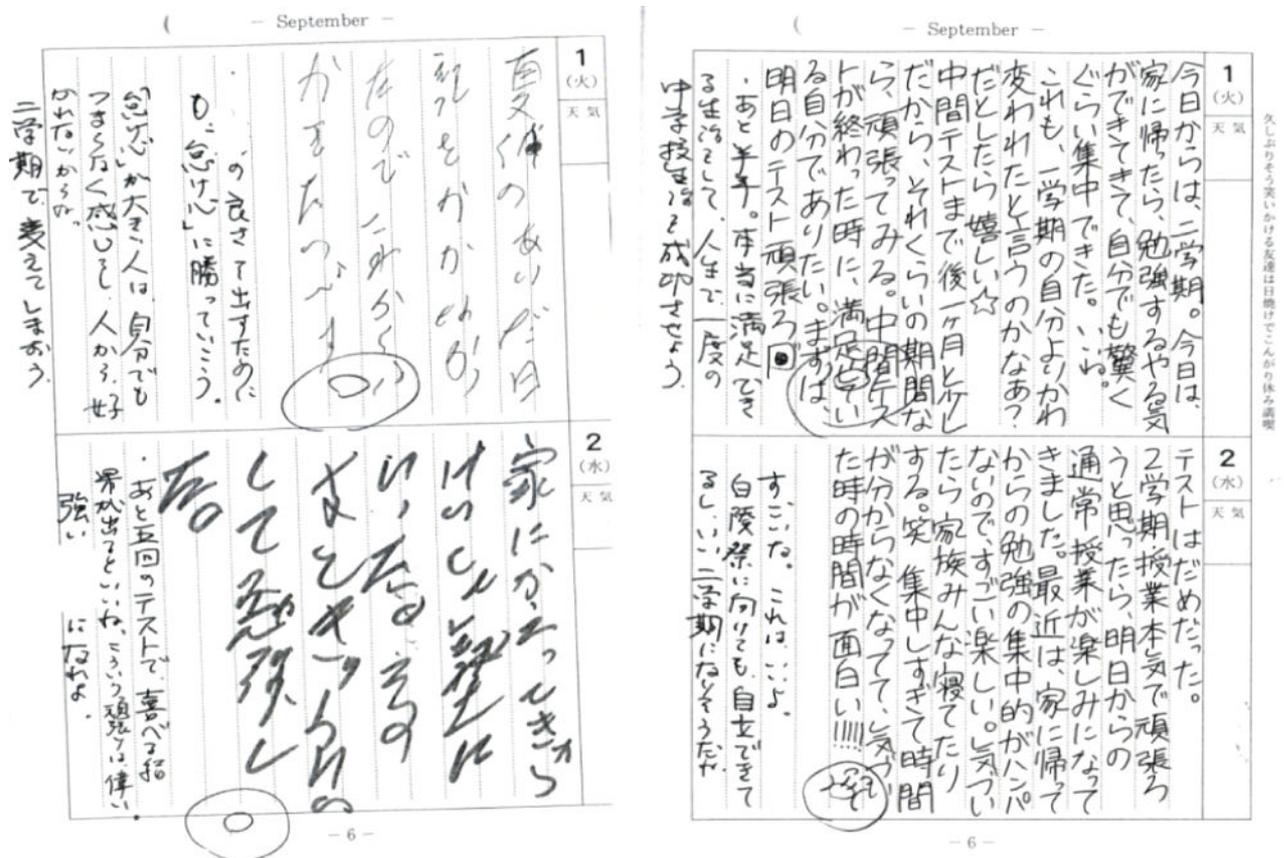
(3) 「自己肯定感」「集団への所属意識」の向上に向けた学級活動

ア 生徒の良さを認め自己肯定感に結び付ける日記指導



学年当初から、毎日全員の日記(知多地方には、若あゆ日記という日記帳があり、毎学期生徒全員に配布される)を読み、コメントを返すことを続けている。

学級全員の生徒と毎日必ず言葉のやり取りをすることができ、その時々一人一人の考えを知ることができる。その中で、生徒の良さ、良い考え方を認め、自己肯定感に結びつける言葉を書くように意識している。毎日続けることで、一人一人にあった考え方を伝えられ、日常の会話だけでは伝えられない生徒の良さも伝えられる。自分からなかなか教師に話しかけられない生徒も、日記帳の中で次第に心開き、心の葛藤を書くことができるようになる。



イ 集団の考えを共有し、所属意識を高める日記集(学級通信)

毎日良い日記を一つ選んで、それを教師が活字にし「日記集」として配布している。学級の生徒の考えと学級担任の考えを知りことで、考え方の共有につながっている。この日記集は、行事のたびに「皆から皆へ」のメッセージを載せて、言葉での「交流の場」としても活用している。集団への所属意識を高めたり、生徒同士のつながりを感じさせ学級の中での有用感を高めたりすることに役立っている。

ウ 自己肯定感を高める保護者の言葉

家庭に毎日の学級の様子を伝える手段として日記集をファイリングしたものを持ち帰り、保護者にも読んでもらっている。時には、それを読んだ保護者からの意見も日記集に載せ、家庭と学校との考え方を共有する手段としても活用している。

〈保護者から(昨年度のもの)〉

合唱コンクール見に行きました。A君の指揮がすごいよと言っていたので、楽しみにしていましたが、よかったです。うちの子が家で「Aかっこいい」と言っていました。今日の『疾風怒濤』でも、素晴らしいって書いてありましたが、クラスの子がそう思えるのが私はとても大切だと思いました。よかったです。1番でした。

5 今後の課題

学級において、「自己肯定感」と「集団への所属意識」は、確実に変化してきているように思う。アンケートなどを行い、これからの変化を追い、規範意識が高められているか検証していきたいと考えている。

また、「自己肯定感」と「集団への所属意識」以外にも、学校生活の中で大きく変えられることのできる「向上心」に着目し、その高まりと規範意識とのかかわりもつかんでいきたいと考えている。

さらに、道徳の授業などでルールやマナーの内容を取り上げ、道徳的判断力や実践意欲を高められる授業も行いたい。「心のノート」にある「法やきまりを守る気持ちよい社会を」「つながり合う社会は住みよい」「不正を許さぬ社会をつくるために」などのページを活用して、中学校卒業後の自分の生き方を考えさせながら規範意識向上につなげたい。



写真3 みんな笑顔

まごころをもち心身ともに健全で，地域から愛される生徒の育成

－学校・家庭・地域のふれあいを大切にしながら－

刈谷市立朝日中学校 吉田 幸和

1 はじめに

本校は，刈谷市の南部に位置し，生徒数 870 名，開校 22 年目を迎えた比較的新しい学校である。学区には，JR 東海道本線と主要な国道が通り発展を続けている。保護者は，他の地域から移り住み，新しく住民になった人たちが多く。こうした地域事情を考慮し，今後，学校を中心として地域やそこに住む人のつながりを深めていくために，人の気持ちの分かる人間，人のために行動できる人間に育ってほしいと願い，PTA や生徒，職員の意見を基に，平成 5 年 3 月に「まごころ」と校訓を決定した。そして，現在もこの校訓を核にし，「まごころをもち，心身ともに健全な生徒を育成する」ために，毎日の教育活動に取り組んでいる。

その結果，学校全体としては，一時期心配された問題行動が急激に減り，現在は落ち着いている。しかし，生徒同士の小さなトラブルが原因で不登校傾向になる生徒がいたり，学校でおとなしい子とされている生徒が問題を起こしたりする。また，自分に対して肯定的にとらえている生徒が少なく，学校ではあいさつをするが，地域ではそれができない生徒が多い。

このような生徒の実態を踏まえ，目指す生徒「まごころをもち心身ともに健全で，地域から愛される生徒」を育てるためには，学校・家庭・地域が協力して互いに共通理解をしながら指導をしていくことは重要である。そのために，学校での指導の在り方を見直したり，学校と家庭や地域との触れ合い方を探ったりして，目指す生徒を育てるための具体的な方法や内容を明らかにする必要がある。そして，実践しながら，これらの点を明らかにしていくことで，規範意識の高い生徒を育てることができると考えている。

2 研究の目的

生徒に生きる力となる豊かな人間性と社会性を育成するために，家庭や地域と共に道德教育を進める。例えば，学校・家庭・地域が一体となる体験活動を行ったり，学校生活全体に渡り，自他共に大切にすることを意識付けたりすることで，道德教育の一層の充実・推進を図り，まごころをもち心身共に健全で，地域から愛される生徒を育成することを目的とした。

また，研究の仮説を「道德の時間の学習内容を見直したり，体験活動とのかかわりで道德教育を進めたりする中で，学校・家庭・地域が相互に連携し，自己肯定感をもたせながら道德教育を進めていけば，規範意識が高まり，目指す生徒像『まごころをもち心身とともに健全で，地域から愛される生徒』を育成することができる」とし，実践を通して検証していく。

3 研究の内容

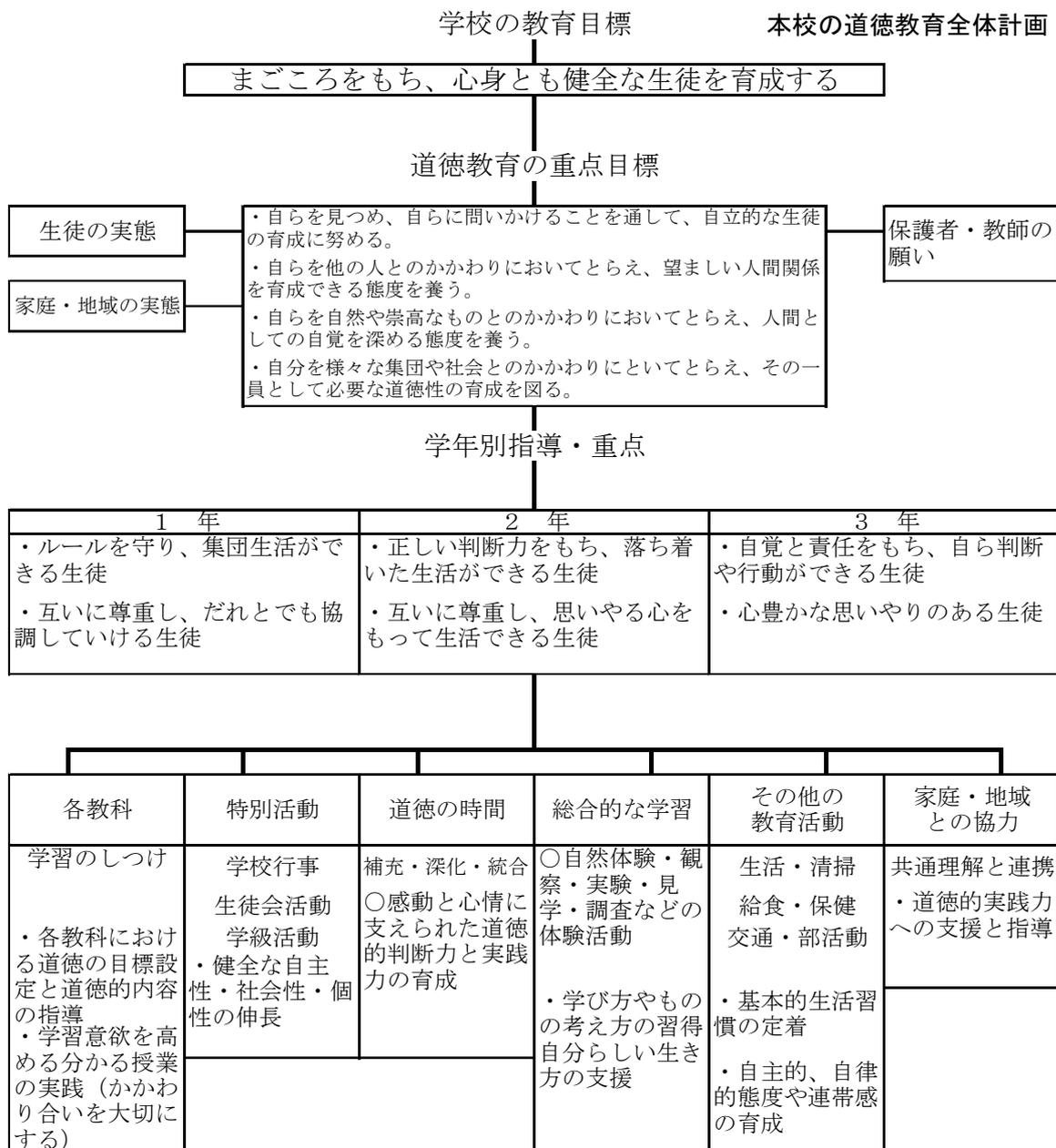
主題に掲げた生徒像に迫るために，以下の実践による生徒の変容を追っていく。

- ア 年間指導計画を見直し、かかわり合いを大切にした道徳の時間を計画的に実施する。
- イ 豊かな心を育てる体験活動を実施し、道徳の時間との関連をもたせる。
- ウ 学校・家庭・地域との触れ合いを深める活動を実施する。

4 研究の実際

(1) 年間指導計画を見直し、かかわり合いを大切にした道徳の時間を計画的に実施する。

本年度は、「まごころをもち、心身ともに健全であり、人から愛される生徒を育成すること」を道徳の目標とし、毎週の道徳の時間もこの達成を目指している。今年度、道徳教育推進教師を軸にして道徳の全体計画を見直し、各学年の道徳担当者が中心となり道徳の時間の年間指導計画を見直した。



そして、生徒の抱える課題を解決するために、生徒の実態に合った資料を選択したり、指導過程の工夫をしたりし、この時間の指導を進めている。毎週の道徳の時間は、各学年の道徳担当者が中心と

なり生徒の実態を基に、計画している。各担任が指導案を作成し、学年会にて指導案の検討をしている。1学期の学校公開日の4時間目に一斉に道徳の授業を行った。 **2年生の道徳年間計画（1学期）**

月	週	主 題 名	ね ら い	指導内容	学校行事等
4月	1	うちの総理ちゃん	1 ・かけがえのない生命を大切にし、どんな状況でも精いっぱい生き抜こうとする気持ちを高める。	3-(1)生命の尊重	
	2	一人じゃないよ	1 ・人間としての誇りをもって、自ら誠実に考え行動して、その結果に責任をもとうとする気持ちを高める。	1-(3) 自律の精神、自主、誠実、責任	授業参観日
	3	ガランチード	1 ・わが国の文化を愛し、日本人としての誇りをもって生きていこうとする気持ちを高める。	4-(9)愛国心	
5月	1	開拓者の決心	1 ・他の人に対して深い理解と思いやりの心を持ち、温かい心で接しようとする気持ちを高める。	2-(2)人間愛、思いやり	
	2	プレーボール	1 ・相手の個性や立場を尊重し、いろいろなもの見方や考え方があることを理解して、謙虚に他に学ぶとうする気持ちを高める。	2-(5)個性尊重、寛容・謙虚	観劇会
	3	温かい笑顔忘れずに	1 ・社会への奉仕と、進んで多くの人々に役立ちたいとするボランティアの精神を大切にすることを高める。	4-(5)勤労、社会奉仕、公共心	生徒総会 全校集会
6月	1	トランペット	1 ・身の回りを整えることの必要性を理解し、節度や調和を保って生活しようとする気持ちを高める。	1-(1) 望ましい生活習慣、心身の健康、節度と調和	
	2	母の反撃	1 ・家族の中での自分の役割を自覚し、互いに助け合い、明るい家庭を築いていこうとする気持ちを高める。	4-(6)家族愛	
	3 ・ 4	Vサイン	2 ・礼儀の意義を理解し、他の人に対して思いやりの心を表現しようとする気持ちを高める。	2-(1)礼儀	授業参観日 P T A 2年学年総会
7月	1 ・ 2	林間学校を成功させよう	2 ・林間学校という目標を目指し、自分なら何ができるのかを考え、それに向かってやり抜く強い意志をもつ。	1-(2)希望・勇気、強い意志	1日学校公開日
	3	天井が明るい	1 ・生きることの大切さを自覚して、生命を尊び困難に負けることなく、強く生きようとする気持ちを高める。	3-(1)生命の尊重	

1年の主題は、「役割と責任」。2年は、「強い意志」。3年は、「正義感」でそれぞれ実施した。その時の2年生の指導案は次頁のようである。生徒は、真剣に誘う側と誘われる側に分かれてロール



< 2年「強い意志」公開授業の様子 >

プレーをしていた。最初は、どうしたらよいのか困っていたペアもあったが、しだいに慣れ、相手を変えながら取り組んでいた。生徒の感想には、「恥ずかしかったけど、友達と触れ合い楽しかった」「みんなで守ることが大切であることが分かった」などであった。友達との触れ合いを通して、自分たちが取るべき正しい行動を、はっきりさせることができ、誘惑に負けない強い意志をもつことの大切さを実感した。その他の学年でも、多数の保護者の参加の下、保護者にもルールについて

考えてもらいながら、どの学級も落ち着いた雰囲気の中で授業が進められた。生徒は、ルールの意味や守ることの大切さをじっくり考え、自分の生活を充実させるためにルールが必要不可欠であることをかかわり合いながら学ぶことができた。

2年「強い意志」指導案

主な発問と生徒の心の動き	指導上の留意点
1 林間学校を成功させるために必要なことは何ですか。 ・準備をしっかりする。 ・一人一人が自分の仕事に責任をもつ。	・学習プリントを配付し、プリントに考えを記入させてから意見を発表させる。 ・机間指導をし、それぞれの意見を把握する。
2 林間学校のルールはどんなものが考えられますか。 ・不要物を持ってこない。 ・川で勝手に遊ばない。 ・時間を守る。 ・自然を壊さない。	・学習プリントに自分の考え記入させてから意見を発表させる。 ・机間指導をし、意見を確認する。
3 不要物を持ってこようと誘う子と誘われる子に分かれて友達を誘ってみましょう。	・生徒同士でロールプレイングをさせる。 ・隣同士や前後などいろいろな子と行う。 ・本当に持ってきたいものを考えさせて、一緒にやりたいという気持ちを持って話し掛けるよう伝える。 ・誘われたときに断れなかった人数を確認する。
4 もし不要物を持ってきてしまったらどうなりますか。 ・色々な人の信用や信頼を失う。 ・みんなに迷惑をかけてしまう。 ・学校のルールが厳しくなる。	・学習プリントに記入させてから意見を言わせる。 ・机間指導をし、それぞれの意見を確認する。
5 自分に対して、人に対して自分がどうすればよいのかを書きましょう。	・時間があれば記入させてからそれぞれの意見を発表させる。 ・次回は林間学校のルールを考えることを伝える。

(2) 豊かな心を育てる体験活動を実施し、道徳の時間との関連を持たせる。

1年生は「福祉実践教室」、2年生は「職場体験学習」、3年生は「保育学習」を主な体験活動として位置付け、道徳の時間との関連をもたせながら、道徳性の育成を行っている。

ア 2年—自分を見つめ、働くことを考える「職場体験学習」—

生徒に職業観や勤労観を身に付けさせ、自らが進路選択できるようにキャリア教育を推進している。職業に関する諸能力やコミュニケーション能力の育成、未来設計の資質向上を目指して実施した。

(ア) 働くことを問い、マナーを磨く「事前学習」



<マナー講座の様子>

事前学習として、自分の夢や願いを書かせ、働くことの意義や苦勞、そして喜びを考えさせる学習を行った。職場体験学習に向けて、ビジネスマナー講師の落合先生を迎えマナー講座を行った。おしゃれは自己満足であり、身だしなみは相手満足であることを教えていただいた。また、清潔感のある身だしなみや笑顔の作り方、あいさつの仕方などを実践的に学ぶことができた。今回のマナー講座では、人に接するマナーを学んでおくことは、未来の自分を見据える良い機会となった。さらに、教えていただいたことは、その後の学校生活や授業の中で定着を図っていった。お世話になる

事業者には、今回は生徒が中心となり依頼の電話をした。結果 122 箇所の事業所が依頼を受けてくだ

さり、その後、履歴書や依頼状を書き、事前打ち合わせに向けた準備を進めた。

(イ) 職場体験学習 (11/9～11/13)

ほとんどの事業所で5日間の職場体験学習を行うことができた。この体験学習では、働くことの大変さや難しさ、あいさつや言葉遣い、身だしなみなど、基本的な事柄の大切さを学ぶことができた。事業所からは、「事前の研修を受けてきたので、礼儀やマナーについては、何も教えることはありませんでした」や「3日目が過ぎた頃から、進んで仕事をやってくれた」などの感想をいただいた。反面、「積極的にやってくれる子とそうでない子の差があった」や「一生懸命やっているが、返事やあいさつの声が小さかった」などの、貴重なご意見もいただいた。

(ウ) 振り返りの活動で心を磨く「事後指導」

体験して学んだことを、それぞれがレポートにまとめ、振り返り活動を行った。レポートの形式は、「テーマ」や「仕事の内容」、「職場の人から学んだこと」や「感想」の概ね4項目であった。12月に入り報告会を行うために、準備を開始している。また、完成した学年テーマ「未来の“自分”を切り拓く職場体験学習」のレポート集を持参し、各事業所にお礼訪問に出掛けた。生徒は、それぞれにやり遂げた達成感や成就感を得ることができた。この訪問後に、担当で反省会を開いた。課題としては、職場体験学習が5日間であり、受け入れの事業所を探すのが大変であったことや生徒の希望する職種に偏りがあつたり、希望する職種の受入先がなかったりしたことなどであった。また、事業所と学校の連携をさらに密にする必要性を感じた。

生徒の体験を参考にしながら、主題名「本当のボランティア」「社会への奉仕」「人を思いやる心」の3つについての資料を作成した。そして、3学期には、この資料を基に「社会への奉仕」を道徳の時間で取り上げた。今まで使っていた資料以上に、生徒の考える意欲を高め、進んで社会のために尽くし、よりよい社会を築いていこうとする気持ちを高めることができた。

イ 3年一幼児と触れ合い、自分を見つめる保育学習一

家庭科の「家族と家庭生活」の単元と総合的な学習の時間及び道徳の時間を関連付けて実践している。幼児との触れ合いを通して、人との触れ合いの大切さや子供が育つ環境としての家庭や地域の役割に気付くとともに、現在の自分を見つめ、これからの自分の生き方を考えるきっかけになることをねらっている。

(ア) 1学期【幼児と楽しく遊ぼう 2時間実習】

まず、「自分を見つめよう」ということで、詩「いのちのバトン」や絵本「赤ちゃんてね」などから赤ちゃんの不思議を学んだ。その後、自分の幼い頃の様子を調べそれを発表し、マイブックにまとめさせた。次に、幼児の体や運動機能の発達を考えるために赤ちゃん人形を抱っこしたり、資料で調べたりした。マイブック作りでは、自分の保護者に熱心にいろいろなことを尋ね、誰もが丁寧に作ることができた。第1回目の保育実習の計画では、それぞれがマイテーマを決めてから実習に参加した。学校に戻ってから、保育実習で見付けたことをまとめさせた。



＜幼児と楽しく遊ぶ様子＞

ここでは、幼児と遊ぶ中で幼児の姿や遊びの様子をはっきりとらえさせ、幼児は遊びの中でいろいろな学習をしていき、幼児にとって遊びは大切であることを気付かせるようにした。

(イ) 2学期【幼児とふれあおう 半日実習】

幼児の生活習慣について考えさせ、第2回目の保育実習の計画を立てさせた。幼児のよりよい成長をキーワードに、学習を進めた。それぞれが、自分の課題をもち、幼児の成長を重点にした触れ合い方を考えさせた。保育実習後は、前回と同様に保育実習で見つけたことをまとめさせた。生徒は、「幼児は、周りのいろいろな人とかかわりの中で育つこと」「幼児であっても相手のことを思いやる優しい心を持っていること」「まじめに話を聴いてくれる人を好きになること」など、幼児と真摯に触れ合った結果いろいろなことに気付くことができた。実習後に、幼児の成長にとってよりよいかかわり方を求め、クラスで話し合い活動をさせた。幼児との実際に触れ合った後なので、それぞれ自分の担当した幼児を思い出しながら、真剣に自分の意見を言ったり、友達の話の話を聞いたりしていた。その後、子供を取り巻く環境や子育て支援制度、子どもの虐待について、学習を深めていった。

(ウ) 3学期【幼児の心をつかもう 1日実習】

3学期に入り、第3回目の保育実習計画を立てさせ、実践した。生徒各自が明確な計画を立て、幼児の心をつかめるように支援を行った。実習に行く前には、絵本の魅力を知らせるために、すべてのクラスに読み聞かせの会を設定し、地域の講師から、絵本の魅力をどう幼児に伝えるのかを教えていただく機会を設けたことも効果があった。

この一連の体験を通して自分と向き合うことができたり、今まで自分の成長を支えてくれた人たちへの感謝の思いをもったりすることを期待している。そして、規範意識を高めながら、それぞれの生徒が、自分の人としての生き方や在り方を見つめるきっかけとなるように今後も学習を深めたい。

(3) 学校・家庭・地域との触れ合いを深める活動を実施する。

ア 10月31日の課外授業について

生徒と地域の人々との触れ合いを通して、地域の力を学校に取り入れたいと考え、以下の2点をねらいとした。一つ目は、学区及び学区近隣の地域に住み、それぞれの分野で優れた技能をお持ちの方たちを地域の先生（講師）として招き、課外授業を設定する。そして、生徒は自分の取り組みたい教室に参加し、地域の先生と触れ合う中で、その人の心と技や生き方を学ぶ。二つ目は、保護者にも、協力と参加を呼び掛け、家庭・地域・学校の連携を図ることである。

(ア) 講座と地域の先生の決定

課外授業がスタートした頃は、1学期からPTA役員や職員が中心となり、課外授業の地域の先生を探していた。しかし、現在は、課外授業が地域に浸透してきたこともあり、概ね昨年度の実施案を基に地域の先生を決定することができている。そのため、講座の内容変更については、学年の実態に合っていないものについて他の学年と入れ替えをしたり、多少新しくしたりするだけになってきた。本年度も、1学期より電話で講師依頼を始めた。昨年度講座をもっていた先生方は、誰もが快く引き受けてくださった。先生によっては、「電話を待っていました」という方もいて、「昨年楽しくやらせていただいたので、今年もぜひお願いします」という声が聞かれた。今まで、この「課外授業」を積み重ねてきた結果だとうれしく思った。本年度も、3学年で40講座、地域の先生99名の参加で開催した。



<講座「知立山車文楽」の様子>

(イ) 課外授業当日の様子

インフルエンザのために、3年生の講座が実施できなかった。その関係もあり、各講座の受付についてはあまり混雑することもなく、講座の荷物運搬についても、PTAの地区委員や学年委員が中心となり、荷車やエレベーターを使い、スムーズに各講座場所に運搬することができた。また、講座ごとに、講師とPTA担当者との打合せも十分に行うことができた。時間前に、各学年の打合せ会場には、代表生徒が地域の先生を迎えてに来ていて、生徒のやる気を十分に感じた。

生徒は自分たちの取り組みたい講座を選択したこともあり、この授業を1学期からとても楽しみにしている。折り紙の講座では、講師の先生が、「作品の内容が例年より難しく、生徒が最後まであきらめないで作品を作ってくれるか心配であった。しかし、時間を延長しても生徒は集中して取り組んでくれた」と、生徒の活動の様子を褒めていただいた。また、講師さんとPTAの担当者が、講座が終わっても作品について楽しそうに話している姿を見掛けた。その他の講座でも、「生徒さんがこんなに一生懸命やったださるとは思わなかった。来年もぜひやりたい」と感想を述べていた。PTA担当者の感想では、「こんなに素直に生徒さんが活動してくれて、うれしかった。担当者をやって生徒や学校のことがよく分かった」というものが多くあった。

(ウ) 成果

講師の先生は地域の方が中心であり、それぞれの講座の中で講師の先生と心の交流を深めることができていた。また、講師の先生と共に真剣に活動する中で、講師の先生の技や生き方を感じ取ることができ、地域の人たちと心を通わせる活動ができていた。そして、今後この課外授業が、本校の生徒が、触れ合うことの大切さを学ぶ機会になればと考えている。

昨年度も講座の運営をPTA講座担当者に依頼した。職員からは、「今年も、講座の司会を保護者がやってくれた。とても助かった」という、感想が出てきた。また、保護者に、生徒と一緒に講座に参加してもらう中で、生徒と触れ合い、本校の生徒を理解してもらう良い機会になった。来年度は、さらにPTA担当者の役割を見直し、地域と職員が共につくり上げるよう改善していきたい。

イ 父親の参加



<おやじの会「総会」の様子>

本年度、元PTA会長の発案により、過去2～3年のPTA役員が賛同して「おやじの会」を立ち上げるようになった。設立の趣旨は、「学校・家庭・地域の連携を深める機会、地域の方々と接する機会、親同士の交流する機会づくりをし、生徒のモラルを向上させるため」である。保護者たちが中心となり、学校活動や地域活動の支援を行い、生徒が安全で安心に過ごせる地域づくりに少しでも役に立てばと考えている。

1学期当初より運営に関するアンケートを実施し

て、「おやじの会」の設立準備を始めた。その結果、10月24日に「おやじの会」の総会を開催することができ、本格的に活動を始めることとなった。最初は、10月31日（土）の課外授業の駐車場係としてのボランティア活動を行った。今後の計画では、親子でJR東刈谷駅周辺の清掃を行ったり、校内環境の美化活動を行ったりする予定である。そして、このような活動を通して、生徒の規範意識を高めたいと考えている。

ウ 家庭や地域との連携を深める

学校での様子を家庭や地域に伝え、共に指導していき、生徒を育てていくことは重要である。そこで、学校だよりや生徒指導だよりを家庭に配付するだけでなく、地域の郵便局やJAの支店、銀行などに掲示している。また、学校のホームページを使って、最新の学校の情報を保護者に知らせている。このようにして生徒の良さや活動内容を家庭や地域に紹介することで、本校の生徒のモラル向上を目指す教育に対して、さらに理解や協力を得ている。今年度は、定期的に保護者にアンケートを実施している。そのアンケートには、生徒のモラルについて触れているが、アンケート結果を比較することで、モラル向上への取り組みの成果を把握したいと考えている。

5 研究のまとめと今後の課題

(1) 成果

ア かかわり合いを大切にしながら道徳の時間を実施したことで、生徒は、クラスの中に自分を見いだすことができ、落ち着いて学校生活が送れるようになった。そして、生徒は、学校や社会のルールを守ることで、互いに安心して生活できることを理解し、規範意識を高めようとする姿勢が見られるようになってきた。

イ 豊かな心を育てる体験活動を実施し、道徳の時間との関連をもたせることで、生徒は、実際に体験したことを基に、自分のとるべき行動を振り返り、正しい行動を強くイメージできるようになってきた。そして、周りの人に感謝する気持ちが育ってきた。

ウ 学校・家庭・地域との触れ合いを深める活動を実施したことで、保護者や地域の方が、今まで以上に本校の生徒を見守ってくれている。そして、生徒の良い点や悪い点を情報提供する方が増えた。また、PTAの朝の立ち番指導の方の感想に「あいさつがよくなるようになった」「横断歩道の渡り方もよくなってきた」という内容が増えてきた。地域に愛される生徒、規範意識をもった生徒が育ちつつあることが実感できた。

(2) 今後の課題

今後の課題については、以下の3点である。

ア 体験活動と道徳の時間のかかわりを更に密にする。

イ 「おやじの会」については、保護者の思いを大切にしながら生徒の規範意識を高めるように進めていきたい。

ウ 地域の行事へ生徒が参加するためのシステム作りをする。

特に項目ウについては、地域には地域に根ざした行事があり、地域の方々も生徒が参加することを望んでいる。しかし、地域の方々には、生徒は部活動や学習があり忙しいなどの理由で参加できないと考えていることが多い。そこで、学校が地域の行事を把握し、生徒に地域の行事に参加するように呼び掛けることで、地域の行事に参加する機会を増やしたい。そして、地域の活動に生徒が生き生きと参加することで、より地域から愛される生徒を育てていきたいと考えている。

6 おわりに

目指す生徒像を育てるために、今まで本校で行ってきた教育活動の質を高めながら、無理のない範囲で様々な活動を行ってきた。本年度は、まだスタートの年であり、一つ一つの手だてが、十分検証できないままである。今後も継続研究していく中で、規範意識を高めるための本校としての手だての有効性を明らかにしていきたい。

守高生の規範意識を育てる

―地域と連携し、体験活動を重視した道德教育の実践―

愛知県立守山高等学校 菅原 弘勝

1 はじめに

本校は地域の強い要請に応え、昭和49年に東谷山麓の志段味の里に産声を上げて以来、本年度で開校36年目になる。開校当初は地元の生徒が多く集まり、地域の発展とともに地域に根ざした学校という目標を掲げ、進学実績も高く部活動も盛んであった。

しかし、開校20年を過ぎるころから、生徒の状況に少しずつ変化が生じてきた。その原因として、複合選抜入試制度の導入や、生徒数の増大に対応して近隣地域で新設校開校、それに伴って本校生徒の通学地域拡大など、本校を取り巻く様々な状況の変化が挙げられる。そのため、本校の教育実践を省みて、再度「地域に根ざした特色ある普通科高校を目指す」の願いのもと、平成12年度より全教職員、PTAそして生徒が一丸となって学校改革に取り組み、数年の実施後、問題行動が多かった時代をようやく乗り越え、現在ではかなり落ち着きを取り戻した。

最近の傾向として、ルール・マナーを守らない生徒や、特に目立たない生徒が問題を起こしたり、経済不況で親の所得が低下し家庭環境に問題を抱え、精神的に不安定になったりする生徒が出てきている。そこで、道德の授業にとどまることなく、地域で様々な体験をする機会や場を増やし地域社会と触れ合う機会を積極的につくり、生徒の健全育成に向けた学校の体制づくりと、社会の変化に対応した学校づくりを課題とした多様な体験を設定することが望ましいと考えた。生徒の実態から何が必要か、また、その要因は何か等、考え方を整理し生徒の実態に即した理想的なカリキュラムをつくり、家庭や地域との円滑な連携を図る等、様々な観点から実践可能で具体的な方法や内容とその対応の在り方を考えることで、規範意識の醸成に努めようとしている。

2 研究の目的

「心の教育」、広い意味での道德教育には、家庭、地域社会の協力が必要である。そして、あらゆる教育活動を通じて豊かな人間性を育て、よりよく生きていくための価値観を養い、生きるための実践的な力を育てなければならない。そのために、心を育てる道德教育の全体指導計画を示し、生徒の人間関係形成能力を育成し、自己実現に向けた意志決定能力を身に付けるようにすること、また、家庭、地域社会との協力やかかわりを通して、地域と連携した体験学習や地域社会との協力関係に根ざした活動を推進することをねらいとする。

3 研究の内容

本校生徒の規範意識を育成するため、以下の2点を中心に研究した。

- (1) 心を育てる道德教育の全体指導計画
- (2) 校内の指導体制の充実と異校種、家庭・地域との連携の在り方

(1) 心を育てる道徳教育の全体指導計画
平成21年度 守山高校「道徳教育全体計画」(案)

生徒の実態 遅刻防止に努めたことで「時間を守る」、「約束を守る」等、基本的な生活態度の改善はみられた。 一方で、身だしなみ不備、身勝手な言動による迷惑行為、登下校のマナーの欠如等、集団の一員としての自覚、責任感が乏しい生徒が一部みられる。	教育目標 「歴史を創造し、社会の発展に寄与するたくましい人間をはぐくむ」 校訓 「今、ここを生かす」 基本方針 「人として、高校生としての基礎・基本を身に付けさせる」 →「明るく、元気で、爽やかに、当たり前のできる生徒の育成」	教育関係法規 ○ 日本国憲法 ○ 教育基本法 ○ 学校教育法 ○ 学習指導要領
保護者・地域の実態 本校は、地域貢献・社会奉仕活動を推進しているため、教育活動に対して好意的な印象をもっている保護者、地域住民が多い。 しかし、一部の生徒による登下校のマナーの悪さから、苦情を寄せられることがある。	学習指導 ○ 学習習慣の育成 ○ 基礎学力の定着 生徒指導 ○ 基本的な生活習慣の育成 ○ 身だしなみ指導の徹底 進路指導 ○ キャリア教育の推進	本校道徳教育の推進 ○ 人間としての在り方生き方を考えさせる教育を推進する。 ○ 花作り等、異校種交流を通して、地域貢献活動を推進する。 ○ 地域での交通安全啓発活動と、ボランティア活動や通学路清掃を通して、地域貢献・社会奉仕活動を推進する。
学校生活の道徳教育 ○ 時間を守る、約束を守る ○ 集団の一員としての自覚を育てる ○ 自主的・主体的に行動する態度を養う ○ 身だしなみを整える ○ 挨拶、礼儀、マナー ○ 健康で明るい生徒を育てる	実践目標 リセット！ゼロからのスタート ○ 中学生生活をリセットして、新たに守高生活をスタート ○ 頭を鍛え、体を鍛え、心を鍛え、3年間で自分をリフォームし、ニューキャリアで卒業 本校道徳教育の重点目標 将来、有為な社会人として、活躍するのにふさわしい道徳性の育成と実践力を養う。	学習 苦痛な学習から分かる学習へ →社会に必要な最低限の知識・技能の習得 生活 マナーとコミュニケーション →人間関係形成能力の育成、仲間づくり 進路 自己理解、自己実現、ドリカム →社会への出発準備

各学年のねらい「守高生の規範意識を育てる」		
1 学年「自覚と責任」 ○ 総合的な学習の時間による「仲間づくり」を通して、他者とのかわり方を学び、望ましい人間関係の構築を目指す。 ○ オリエンテーション活動や日々の生活、授業、集会の中で規則を守る重要性を学び、社会で必要とされる規範意識を身に付ける。 ○ 進路意識をもたせることで、自分の在り方を深く考えさせ、物事に取り組む態度、姿勢を自ら改めようとする力を育てる。	2 学年「信頼と協同」 ○ 修学旅行を通じて、心身の調和のとれた発達を目指し、集団や社会の一員として望ましい人格の形成を目指す。 ○ 「ものづくり」の総合的な学習の時間を通して、物事へ創造的かつ主体的に取り組む態度を育て、自己を生かす能力を養う。	3 学年「誇りと自己実現」 ○ キャリア教育の推進の一環として、総合的な学習の時間を有効活用し自己実現を目指す。 ○ 学年集会を利用した道徳教育の実践（学年団による啓蒙活動）と身だしなみ、言葉遣いなど、社会人として必要な能力や態度を身に付けさせる。 ○ 夏休みの学年出校日に、全員参加の清掃活動（校外）を実施し、奉仕の心を育てる。

総合的な学習の時間「Growing Up」		
1 学年「仲間づくり」 人間関係形成能力の育成 生徒一人一人が自分の問題を自分で解決できる力を身に付け、「自尊心」「他人を尊重すること」「コミュニケーション」「問題を解決する技能」をテーマに取り組む。言葉・態度・文字を使った人間関係の在り方について学ぶ。 <FSS（フレンドシップシミュレーション）> ○ 相互理解のトレーニング ○ 怒りをコントロールする ○ トラブル解決法 ○ トラブル解決スキルの実践 <態度・言葉> ○ 客と店員の言葉遣いと態度 ○ 電話のかけ方、手紙の書き方 【参照 資料1】	2 学年「ものづくり」 情報活用能力と将来設計能力の育成 ものを作ることを通して、仲間と協力することの大切さを知る。9講座の中から、自分が関心をもった課題を選択し、情報の集め方や調べ方などの学び方やものの考え方、様々な機関と積極的にコミュニケーションを行う姿勢を身に付ける。 ○ 美しき守山づくり ○ ダンスづくり ○ 折り紙縁起物づくり ○ 俳句で水切り絵 ○ 広告づくり ○ 体づくり ○ 点描画づくり ○ 野菜、花壇、土づくり ○ インターンシップ 【参照 地域応援プロジェクト「守山エコプロジェクト」】	3 学年「夢づくり」 意思決定能力の育成 生徒一人一人が、進路の実現に向けて何が必要かを考え実践する。社会人として通用する教養とマナーを身に付け、自己の向上を図る。 <就職> ○ 働くことを考える ○ 正社員を考える ○ 講話「働くとは」（ハローワーク） ○ 講話「マナー指導」キャリアサポーター <専門学校> ○ 講話「専門学校選びのポイント」 ○ 専門学校の実際（OBによる） ○ 一般教養 <大学・短大> ○ 大学とは ○ 学部・学科の選定 ○ 費用について ○ 小論文実践、面接実践 【参照 資料2】

各教科のねらい					
国語科 ○ 小説教材を通して登場人物の心情を読みとる。しいては相手の気持ちを理解する力を高める。 ○ 古典教材を通して日本文化に触れ、日本人の心の機微を理解するとともに規範意識を身に付ける。 ○ 評論、随筆を通して人権・平和について取り上げられるよう工夫する。	数学科 ○ 数学的活動をする中で、筋道を立てて表現する能力を高めることが必要となるが、同時に判断力を育成する。 ○ 数学を学ぶ中で、工夫して生活や学習しようとする態度を育てる。 ○ 論理的思考を育む中で、相手の考えや行動を理解する力を育てる。	英語科 ○ 外国語（英語）学習を通じて、我が国や外国の言語や文化に対する理解を深める。 ○ 様々な価値観の違いを知りそれを尊重する態度の育成を図る。	地歴科 ○ 歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め、変化していく現代社会で主体的に生きる人間を育成する。 ○ 社会と自分のかかわりを考察させることを通して、生きる主体としての自己を形成させる。	公民科 ○ 現代社会の諸問題を取り上げて考察させる中で、理解を深めさせるとともに、社会の変化に主体的に対応して生きていける人間を育成する。 ○ 社会と自分のかかわりを考察させることを通して生きる主体としての自己を形成させる。	理科 ○ 自然と人間生活とのかわり方を理解させ、その認識を深める。 ○ 事物の現象に関する観察・実験を行い、その本質を理解させ、判断力を身に付ける。 ○ 科学的な自然観を育成し道徳的判断力を身に付けさせる。
保健体育科 ○ 運動を実践することにより自己の責任を果たし、チームに貢献しようとする公正、協力の態度を育成する。 ○ 集団行動を通して時間を守る、ルールを守る、集団に参加し協力するといった態度を養う。	家庭科 ○ 家族の一員としての役割を果たし行動することを認識させる。 ○ 地域社会の一員として、共に支え合う重要性を認識させる。 ○ 生涯を見通した自分の生活について主体的に考えることができるようにする。	芸術（音楽） ○ 音楽の幅広い活動を通して、生涯にわたり音楽を愛好する心情と音楽文化を尊重する態度を育てるとともに、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。	芸術（美術） ○ 美術の幅広い活動を通して、美的体験を豊かにし、生涯にわたり美術を愛好する心情と美術文化を尊重する態度を育てるとともに、美術文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。	芸術（書道） ○ 書道の幅広い活動を通して生涯にわたり書を愛好する心情と書文化を尊重する態度を育てるとともに、書の伝統と文化について理解を深め、豊かな情操を養う。	情報科 ○ 情報化がもたらす利便性とそれが悪用されたときの危険性や、危険を防止するための法律による規制や保護及び情報技術によるセキュリティ対策を理解させるとともに、望ましい情報化社会のために必要なことを学ばせる。

ホームルーム活動・学校行事		
< 1 学年 > ○ オリエンテーション ○ 進路セミナー（中京大学） ○ 進路別ガイダンス	< 2 学年 > ○ インターンシップ ○ 進路別ガイダンス	< 3 学年 > ○ 高大連携授業（中部大学） ○ プレドライバーズセミナー ○ 講話「社会人に求められること」

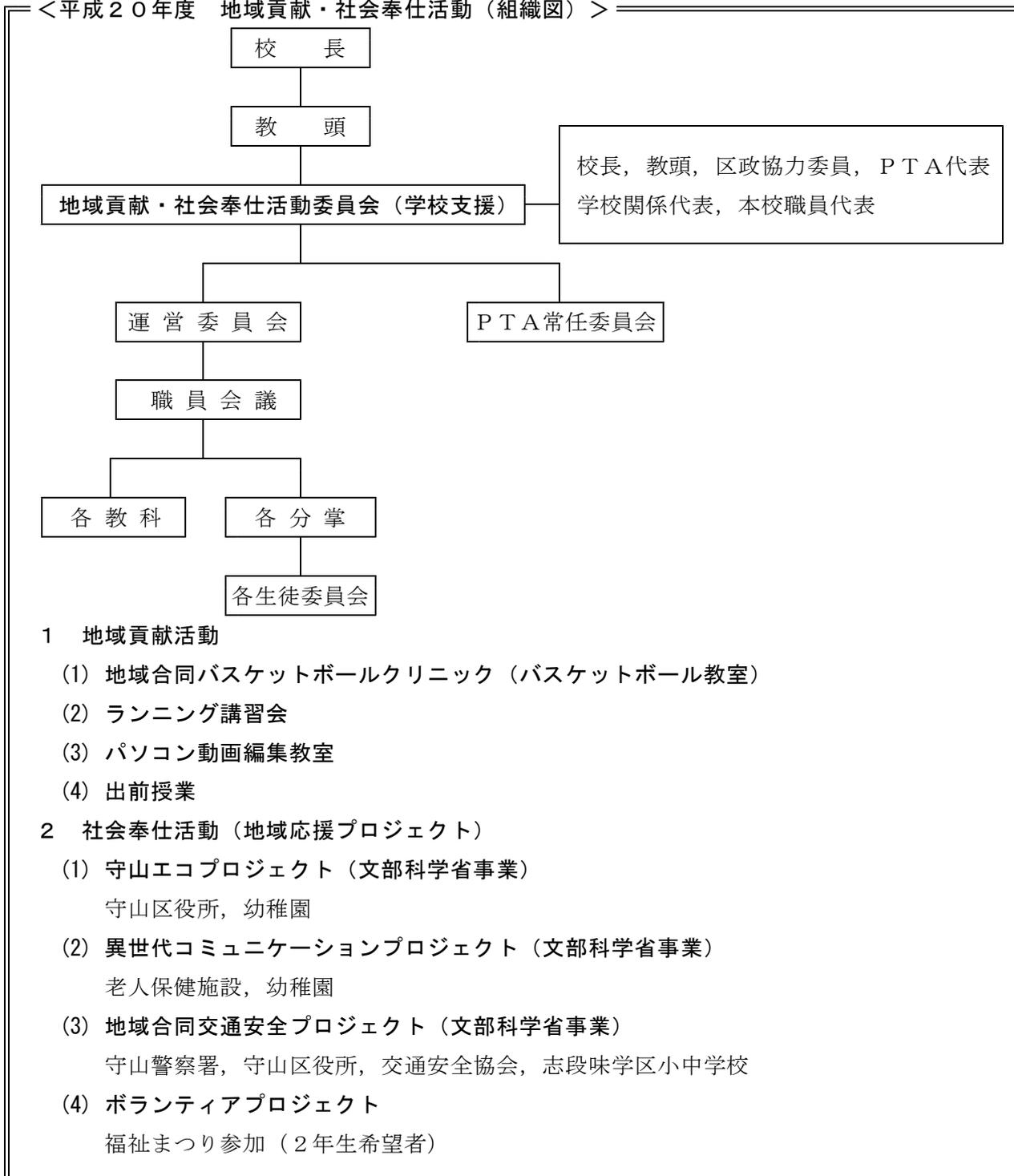
地域と連携した体験活動
<平成21年度「地域とあゆむ未来づくり」地域とあゆむ学校づくり推進事業> 1 「もりやま交通安全ミッション」生徒が交通安全指導高校生の委嘱を受け、地域での交通安全の啓発活動を行い、異世代間の交流を通して次世代の人間を育てる。 2 「花さかもりやま」異校種間で共同して行い、花のネットワークを作って暮らしやすい地域づくりに貢献する。（総合的な学習の時間「ものづくり」） 3 「めざせ！ホテルの里」地域の方々と一緒に、人と自然の共生を目指す教育活動を行う。

(2) 校内の指導体制の充実と異校種、家庭・地域との連携の在り方

学校で学び、家庭ではぐくみ、地域で育つという教育の機能分担は失われつつある。生徒たちに社会や地域の人々とかかわる場を提供し、地域への帰属意識を高めることは大切なことである。総合的な学習の時間や体験活動を更に充実させることによって、道徳観、社会性の育成につながる学習を展開することも可能である。そのために、地域を舞台にした体験学習や地域住民との触れ合う活動など、地域との協力関係に根ざした活動を行っていく必要がある。

ここで、平成20年度地域貢献・社会奉仕活動と文部科学省事業「豊かな体験活動推進事業『地域応援プロジェクト』」の体験活動の一部を紹介する。

＜平成20年度 地域貢献・社会奉仕活動（組織図）＞



＜豊かな体験活動推進事業『地域応援プロジェクト』の活動内容・指導計画＞

1 守山エコプロジェクト

(1) 環境緑化 「総合的な学習の時間」 2年生

総合的な学習の時間「ものづくり」の一環として種から花壇苗を育成し、その苗を地域（コミュニティーセンター、幼稚園等）に配布し、環境緑化に貢献する。

(2) 環境科学 「総合的な学習の時間」 2年生，学校設定科目「生活基礎」 3年生

ア 学校周辺の用水路の浄化活動に取り組む。

イ 実験を通して水質浄化の方法を探る。

ウ 学校周辺の用水路の水質調査（PH，BOD，COD等）を定期的実施する。

エ 手づくりの炭焼き窯を活用して、環境整備で伐採した竹（廃物）を材料に炭を焼く。

オ 焼いた炭を用水路に投入し、水質浄化に役立てる。

2 異世代コミュニケーションプロジェクト 学校設定科目「ライフスキル」 3年生

地域の保育園を訪問し、生徒の手づくりお手玉を使って、昔遊びの伝承を図ったり、手づくり絵本の読み聞かせを行ったりする。

3 地域合同交通安全プロジェクト 「学校行事」 全学年

地域の小中学校，地域住民（特に高齢者）と合同で警察の指導の下，本校生徒が指導者となって交通安全教育・交通安全教室を行う。

【活動の実際】

1 守山エコプロジェクト

(1) 環境緑化

花づくりの経験がない生徒たちが，初秋にパンジーの種まきを行い，ポットあげや灌水等の育苗作業を体験して自分たちの手で苗を作り上げていった。出来上がった苗は，地域の保育園や幼稚園に配付したり，コミュニティーセンター等の花壇に活用したりすることで地域の環境整備に役立て，地域に貢献している気持ちをもたせることができた。



〔生徒や保護者によるパンジー苗移植〕



〔花壇整備〕

(2) 環境科学

本校の南東の湿地帯を水源としたわき水「才井戸流」（用水路）が本校の南を流れている。近年では，生活排水や学校からの雑排水が流れ込み，水質の悪化が心配されている。そのため用水路の水質調査を実施し，手づくり炭焼き窯を活用して，焼いた竹炭を用水に投入したり，また，光合成細菌（EM菌）を投入したりして水質浄化を試みた。この取組によって具体的に成果があったわけではないが，

水質検査による水質の違いを知ったり竹炭による水質浄化を行ったりしたことは、環境教育への意識を高めることができた。



[自然燃焼（炭焼き）]



[用水路への炭の設置]

2 異世代コミュニケーションプロジェクト

学校設定科目「ライフスキル」のまとめとして、生徒が保育園に出掛け、園児と一緒に生徒の手づくりお手玉や布絵本を使った昔遊びの伝承を行った。また、給食の配膳指導の手伝いや園児のうがいの補助等、異世代とのコミュニケーションを通してボランティア活動の大切さを学ばせた。



[給食の配膳指導・お手伝い]

3 地域合同交通安全プロジェクト

(1) 交通安全指導高校生の育成

地域の小中学生、地域住民（特に高齢者）に対し、代表生徒が指導者となって交通安全キャンペーンや交通安全教室等を行った。愛知県交通安全教育チーム「あゆみ」と守山警察署交通課の指導の下、模範的な自転車走行の仕方や交通弱者への指導方法について講習を受け、交通安全指導高校生としての委嘱を受けた。委嘱後の活動として交通安全キャンペーンへの参加や小中学生、地域住民（特に高齢者）を対象とした交通安全教室を実施した。これは愛知県内、初の試みである。

＜交通安全指導高校生が実施する交通安全教室の内容＞

- 自転車、歩行者の通行ルール
- 自転車点検方法について
 - 「ブ」：ブレーキ
 - 「タ」：タイヤ
 - 「ハ」：ハンドル
 - 「ト」：灯火
 - 「シャ」：サドル
 - 「ベル」：ベル
- 反射板の効果（暗所での反射板の効果）



[交付式]

(2) 秋の交通安全県民運動への参加

地域の商業施設で9月29日（月）、30日（火）の両日、授業後に「秋の交通安全県民運動」の啓発活動に生徒、職員、保護者、守山警察署、守山区役所（まちづくり推進室）が参加して地域に貢献した。



[交通安全チラシの配布]



[ケーブルテレビの取材]

(3) 小中学生及び地域住民（特に高齢者）向け交通安全教室

交通安全指導高校生が地域の小中学生、及び地域住民（特に高齢者）に対して、「自転車の安全な乗り方」等の交通安全教室を実施した。

＜実施場所＞

名古屋市立志段味東小学校：10月10日（金）、名古屋市立志段味西小学校：11月10日（月）

名古屋市立志段味中学校：11月12日（水）、志段味地区会館：11月15日（土）

資料3 守高生が指導者となって

平成20年11月吉日

守山高校生による
交通安全教室のお知らせ

愛知県立守山高等学校

秋の候、地域の皆様におかれましては御健勝のこととお喜び申し上げます。日ごろは本校の教育活動に、御理解・御協力頂き誠にありがとうございます。

さて、「交通安全指導高校生」として守山警察署長より委嘱を受けた本校代表生徒が、地域の交通弱者の方々を対象に、自転車の安全な乗り方、安全な通行等の交通安全教室を開催いたします。御参加くださいますようお願い申し上げます。尚、当日は本校生徒の他に、本校職員、守山警察署員も同行致します。



※写真は、本校で平成20年7月10日に実施された『あゆみ隊』による教育・訓練の様子です。

日時：平成20年11月15日（土）10:30～12:00

場所：志段味地区会館

第1部「守山高校生と守山警察署員による交通安全教室」

第2部「アトラクション（エレクトーン演奏）」

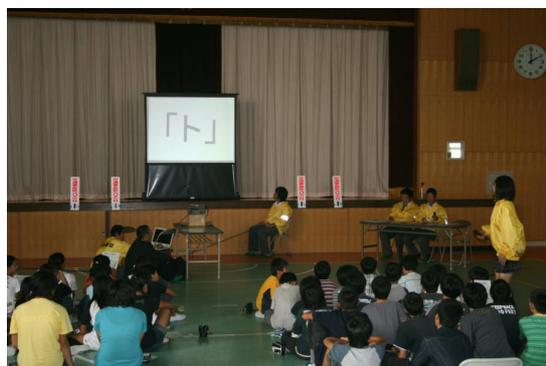
◆お問い合わせ先

〒463-8503 名古屋市守山区中町東栄半元屋敷1287

愛知県立守山高等学校

電 話 052-728-2500

ファックス 052-728-2320

[交通安全教室（志段味東小学校）]



[交通安全教室（志段味中学校）]

(4) 地域合同交通安全大会

交通安全の集大成として、12月4日（木）に本校にて地域の小中学生及び地域住民の方々と合同で交通安全大会を実施し、警察の指導の下、本校生徒が発表及び講師を務めた。

- 本校生徒 活動場所：体育館
「交通安全指導高校生による『交通安全教室』の実践報告」
「愛知県警交通安全教育チーム『あゆみ』による講評並びに指導・助言」
- 小中学生及び地域住民 活動場所：会議室，図書室
「交通安全指導高校生による『交通安全教室』の実践報告と交通安全啓発イベント」
※ 愛知県交通安全教育ボランティア「かけ橋」によるマジック等を行い，交通安全教育・交通安全教室を実施した。
- 愛知県警察活動の紹介 活動場所：体育館
「警察音楽隊と音楽隊女性隊員（フレッシュアイリス）によるドリル演奏・演技」



[交通安全啓発イベント（地域住民）]



[本校実践報告]

4 研究のまとめと今後の課題

前回の学習指導要領から「総合的な学習の時間」が始まり，本校は，生徒の人間関係形成能力の育成の基礎に，「仲間」「もの」「夢」をテーマに教員が協力し合い新しい教材を作成した。生徒の実態に即した生きた教材として，学校教育のあらゆる場面で活用されている。

また，本校は平成17年度より地域と連携した様々な活動を実施している。その内容は，身近な環境問題を取り上げ，生徒自身による学校周辺の環境整備や，地域貢献・社会奉仕活動を通して，勤労の大切さを考え，自信と帰属意識を養う活動となっている。この活動に参加した生徒たちは，人に尽くしたり社会で役立つことでやりがいを感じたりする体験を得ることができ，自分が将来大人の社会でどのように生きるかという課題に出合えたと感じている。そして，地域社会と触れ合うことにより，コミュニケーション能力をはぐくみ，学ぶ意欲，思考力，判断力などを高めることができた。

学校教育で大切なことは，「生きる力」や，自ら学び自ら考える力を身に付けられるような教育活動を展開し，カリキュラムを整備していくことである。そのために，学校や生徒の実態に即した道徳教育全体計画を示すことは，生徒が身に付けるべき道徳の内容を分かりやすく表し，道徳的価値について生徒自ら考えるきっかけとなり，理解を深めるためにも大切な役割を担っている。

学校はどのようにして生徒の道徳性，社会性を養っていったらよいか急務の課題となっている。それは，様々な集団の中での人間関係の経験や学びを通して形成し発達していくものである。したがって，集団における人間の相互関係を本質とする学校での体験は，生徒たちの道徳性，社会性の育成にとって欠くことのできない機会である。そこで，社会の一員としての自覚や責任，共に生きる精神や実践力を養うものとして，学校や地域における体験活動のもつ意義は大きい。教育活動が生徒の内面に響き，確かな学力や道徳性，社会性を育成するために，学校，家庭，地域の教育力，関係機関との連携協力を柱に，今後も実践を続けていきたい。

この顔はどんな気持ち？

次の顔文字にあてはまる気持ちはどれか？線で結べ。

- ① o(^◇^*)o ② (^_^) ③ (TΔT) ④ (-_-) ⑤ (；´Д｀)o ⑥ m(._.)m

「おいこらっ」 「くすんっ」 「すみません」 「えへっ」 「おいおい」 「わーい」

< >に気持ちを書き、その下に顔の特徴を書こう。(< >の中の明朝体は解答です)



< 幸せ >

口の端があがっている
頬があがり、広がる
目尻が下がる
眉がカーブを描く



<① 悲しい >

口は、
目は、



<② 怒っている >

口は、
目は、



<③ 有頂天 >

口は、
目は、



<④ おびえている >

口は、
目は、



<⑤ 困っている >

口は、
目は、



<⑥ 嫉妬(しつと) >

口は、
目は、



<⑦ いじわる >

口は、
目は、



<⑧ 困惑 >

口は、
目は、



<⑨ 恥じている >

口は、
目は、

怒りのコントロールステップ

① 怒っているのを認める

- ・ 身体はどうなっている？（表情・しぐさ・体の様子）
- ・ 言葉はどうか？（言葉づかい・声の調子・話す速さ）

② 落ち着くには

- ・ 深呼吸3回
- ・ プハーと声を出して息を吐く
- ・ 足踏み
- ・ 水を飲む

③ 誰かに話す

- ・ 相談する相手を決める
- ・ 自分の気持ちを話す

④ 独りになり振り返る

- ・ ストレス場面から離れる
- ・ なぜ怒ったのか？
- ・ どうすればよかったか？
- ・ 今後どうしよう？（解決策を考える）

生涯にわたるキャリア形成の基盤を培うために・・・

本校では、キャリア教育の推進を学校の目標に掲げ、「総合的な学習の時間 (Growing Up)」を中心に体験活動を取り入れた系統的・体系的なキャリア教育を推進し、進路実現を目指しています。



インターンシップ (スーパーにて)

1 教育の基本方針

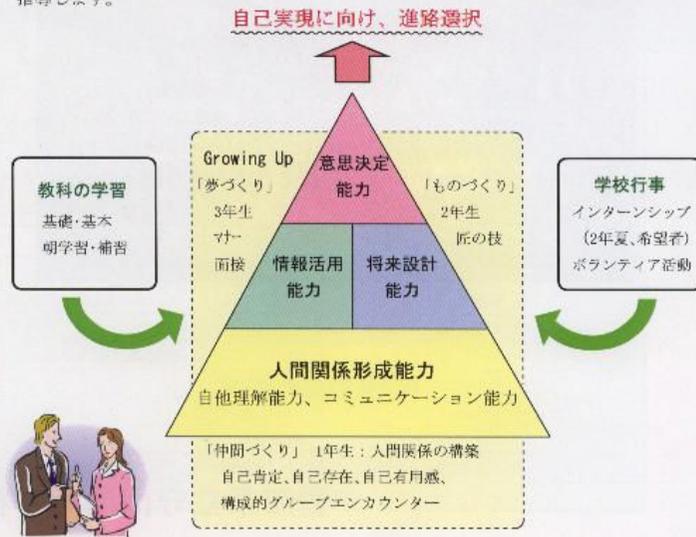
「人として、高校生としての基礎・基本を身に付けさせる」

— 当たり前のできる生徒の育成 —

- 学習：苦痛な学習から分かる学習へ→社会で必要な最低限の知識・技能の習得
- 生活：マナーとコミュニケーション→仲間づくり
- 進路：自己理解の深化、将来設計の立案→社会への出発準備

2 本校におけるキャリア教育

生徒の発達段階に応じた系統的なキャリア教育を推進するために、本校では、人間関係形成能力（自他の理解能力、コミュニケーション能力）の育成を基礎として、情報活用能力、将来設計能力、そして自己実現に向けた意思決定能力を身に付けるよう指導します。



(3) 3年生のキャリア教育の流れ

目標	進路達成への努力		人間力の育成									
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
進路	進路希望調査		進路セミナー			進路希望調査			マナー講話			
行事	個別面談		実力テスト		補習実力テスト		推薦入試説明		前期補習			
総合	「夢づくり」・進路実現に向け進路希望別に準備及び対応											
学習	キャリアサポーターによる就職指導 (主に意思決定能力の育成)											
学習	朝学習による一般教養の定着・補習及び実力テストによる学力向上・高大連携授業											

【キャリア教育の指導】

- ・個別面談を通し、最終的な進路希望を確認する。
- ・保護者会で、具体的な進路先の確認と準備の指導をする。
- ・就職希望者への個別指導（受験企業の決定、面接練習、履歴書作成）をする。
- ・進学（推薦）希望者への面接、小論文指導をする。
- ・就職未決定者の企業見学、個別面談指導をする。
- ・就職内定者への事後指導をする。
- ・保護者会にて卒業後の進路に向け準備させる。



キャリアサポーターによる就職指導



高大連携授業（中部大学）



就職個別指導



卒業生による講話